月夜ー籠の中の鳥ー

月島愛夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月夜ー籠の中の鳥ー

【Ｎコード】
Ｎ８０６３Ｃ

【作者名】
月島愛夜

【あらすじ】
『月の夜、私たちは変わる…』大金持ちである瑠華は色んな醜い環境のせいで少し冷めた人間になっていた。そんな時、同じ環境だった刹那に会い、瑠華は少しずつ変わっていく…。二人の心が通じ合った時、二人は不思議なことに出会う。月、そして人間の心を描いた、学園、ちょいファンタジックストーリー。

プロローグ

籠の中の鳥は、いつまでもその中にいるわけにはいかない。

飛ばさなければ育たない。

例え、目の前に何か光があったとしても

籠の中じゃ、はっきりと見えない。

分からない。確かめられない。

だったら

破ってみようよ

きっと、傍にあるはずだよ

その籠の空ける『鍵』は・・・・・

NO，1『家』

朝日がふわりと包み込むように差してくる。小鳥は美しい声でさえずり、草木はやさしく揺れる。こんな天国ともいえる部屋で、見た目だけはかわいらしい少女、宮塚瑠華はなにやらため息をつきながら本を読んでいる。

「・・・心の扉を開け・・・勇気があれば、大丈夫・・自信を持って突き抜けろ・・。馬鹿じゃないのか、これ」

瑠華は本を投げ、かばんに学校の用意を詰める。その容姿とは裏腹に、汚い言葉で瑠華は喋る。

瑠華は世界的に有名とされている宮塚財閥の一人娘。欲しいものは何でも手に入るし、何か特別に困っていることはない。だが、この頃思うようになってきたのだ。

その思いは、自立したい。この宮塚の家から、逃れたい。そう思うようになってきたのだ。別に何の不自由もない。けれど・・・本当の自分が出せないのだ。どうにかして自分を出したい、そう持った瑠華は、今投げた本「勇気」を読んで見た。だが書いてる内容は陳腐。

「ったく、何が突き抜けろっ！だよ。突き抜けれるかっつうの」

瑠華は椅子を足で軽くける。だがその瞬間ドアがなる音がした。

「瑠華？用意は出来て？」

「はっ・・・はい、お母様。出来ました」

漆黒の黒髪を梳き、赤いリボンの白い制服。金のバッチが光り輝いている制服を慌てて正す。

「今日はやっと始業式ね。ちゃんと宮塚の人間としてきちんと過ごすのよ？わかった？瑠華」

「はい。分かっています。お母様」

瑠華の母、梢はにこりと微笑む。天使のような笑顔がとても印象的だ。だが、それは瑠華にとってとても苦しいものなのだ。母の期待

を裏切るようなことはしたくない。
けれど、自分の思いを消し去ることだけはしたくない。
「では、行って参ります」
瑠華はお辞儀をし、部屋を出る。どこまでも続く長い廊下を一歩一歩、歩調を正して歩く。
茶色い大きな扉を執事が二人がかりで開け、執事やメイドがいっせいに深く頭を下げる。
「いってらっしゃいませ、瑠華お嬢様」
と、いつもの感じで挨拶をする。
「いってきます」
そう言い、瑠華は黒いベンツの車に乗り込んだ。

NO．2『金持ちの学園』

白い宮殿のような学園、聖薔薇学園。周りには真っ赤の薔薇が植えられ、赤い絨毯がしかれている。
この聖薔薇学園は金持ちばかりが集まる学校。ＩＴ関係の社長や大臣の娘まで、色々な人間が通っている。
その中でもトップを走るのが、宮塚財閥だ。みんなを圧倒してしまう気品。そして容姿。それが必要なのだという。
だから、こんな美しい学園でも、瑠華にとっては暑苦しいところに思えるのだ。
取り巻き、としてついてくるのははっきり言ってうざい。
「まぁっ瑠華様が来たわよ」
周りの女子も男子も口々にそう言って、赤い絨毯の道をあける。
「おはようございます！瑠華様。おかばんお持ちしましょうか」
うわ来た…と瑠華は内心鬱陶しく思っていた。取り巻きの連中が周りに群がる。
「結構よ」
やさしくそう言えば取り巻き達は微笑みながら後ろにつく。
いい加減鬱陶しいんだよ…。
瑠華はその微笑みの下でそう考えていた。
いつもと変わらない風景。周りはお金のことしか考えていない馬鹿な人間。瑠華はいい加減参っていた。
「瑠～華ぁーーおはよぉ」
瑠華はその声を聞いたとき、顔を綻ばせて声の方向を向く。
「レナっ！」
彼女は西園寺レナ。この学園で瑠華の次に金持ちのお嬢様だ。瑠華とはまったく違う黄金の髪をなびかせて、瑠華に抱きつく。
「待ってたのよ」
にこりと微笑む彼女の顔を見ると、瑠華は癒される。まぁ、天然的

美少女なのだ。
「まぁ・・・『アルテミスとアポロン』がそろいになったわ・・・綺麗ねぇ・・」
周りはまた騒ぎ出す。
アルテミスとアポロン、とはギリシャ神話の神で、月と太陽のことを意味する。つまり『月』は瑠華で、『太陽』はレナのことを言っているらしい。
「今日はちょっと本を読んでてね。遅くなっちまった」
瑠華は耳元でレナに話しかける。
レナは、本当の自分を出せる唯一の存在なのである。

NO．3『情報』

知的で美しい瑠華、まるで妖精のような可愛いらしいレナ。
この二人を見に来るファンも、いっぱいいる。
「本？まぁ、どんなのかしら。見てみたわ？でも・・分からないでしょうからやめとくわ」
そりゃ分からないでしょうよ。あたしが読んでたのは「勇気」っていう古本屋に売ってた本なのだから。
「えぇ・・そうしといて頂戴」
わざとお嬢様風にそう言うと、レナも笑いそれにつられて瑠華も笑った。
二人は仲良く赤い絨毯を歩く。
だが、こんな幸せな気分をぶち壊すのが、後ろの奴らだ。
約三十人の取り巻きが瑠華とレナの後ろからついてくる。
はぁ・・とため息をついた瑠華を、じっとレナは見つめる。そして後ろの取り巻き達の微笑みかける。
「ねぇ、先生に言ってきてくれるかしら。《西園寺レナは宮塚瑠華に話があるから、一時間目は休みます》ってね」
すると取り巻き達は慌てて教室へと向かおうとする。
「わっわかりました。すぐに伝えてきます」
瑠華はレナを見て苦笑いする。
「さすが・・・レナ」
「あら、それほどでもないわ」
いつもこのパターンだ。この名前を出すと担任たちは文句をいえない。二人の一声で、先生など簡単に辞めさせられるのだ。
「で？話って何？」
レナは微笑みながら、校舎の中の噴水の前に腰を下ろす。瑠華も続けて腰を下ろす。
「あのね、転校生が来るらしいのよ」

「転校生？誰よ」
「男の子らしいわ。同じ二年A組らしいわよ？」
「え、じゃあつまりお金持ちさん？」
　この学園ではA・B・Cとクラスが分かれ、Aは瑠華やレナのような超大金持ち。Bはまぁ普通の金持ち。そしてCは小金持ちだ。つまりAについている取り巻きは、Bが少しで大抵はCだ。
みんな、媚を売ってなんとかAに行きたいのだろう。実際Aに指名されたB・Cクラスの人間は、Aに上がれるとも言われている。
「さぁ・・分からないわ。でも情報によるとかなりの美形らしいわよ」
「情報？ただの噂じゃないの？イモっぽいのが来たりして。感動だねぇ」
「そりゃそうかもしれないけど・・・楽しみね」
「それより頭がいい人来たら困るって、あたし」
レナはそれを聞いてあぁ、と頷く。
「学園一、知的で美しい・・・の知的の部分がなくなるものね」
「そうよ・・・苦労して試験では一番とってるんだから。とにかく気をつけるに越したことは無いわね」
レナはそうね、とだけ言った。
「それだけ？話は。だったら一時間目休まなくてもよかったんじゃないの？」
「あら、瑠華に教えてもらったのよ？一年の時」
『どうせ休むんなら、全部休めばいいじゃん』
「・・・そうだっけ？」
瑠華は思い出しながらもわざと目線をそらす。
「私、楽しかったわ、瑠華と友達になれて。私もいつもの空間に飽きていたもの。瑠華と友達になっていろんなこと教えてもらったわ」
「そっそう？」
瑠華は照れながら笑う。
　実は結構嬉しいのだ。そんな瑠華を見て微笑むレナは、ゆっくり

と噴水の傍のベンチから立つ。
「ね、飲み物欲しくないかしら。買ってくるわ」
「へ？レナなんかにさせれないよ、あたしが行くから座ってて」
「え、でもいつも瑠華にさせてるし・・・」
「なぁに言ってんの。いいから！」
そういい、自動販売機へと向かう。もちろんただの自動販売機ではない。コンピューターが喋って注文を頼むと言う変わった奴だ。
瑠華はゆっくりと歩いて行く。
この後起こることは、瑠華にとって籠から出れる、チャンスになるのだ。
そんなことを知らない瑠華は、のんきに鼻歌を歌いながら販売機へと向かった。

NO．４『転校生』

『どちらの飲み物を所望致しますか？』
自動販売機の前に立った瑠華は、何回もこの機械を見ているが、やはり呆れる。
「なんでコンピューターがしゃべってんだよ」
自動販売機を睨むがコンピューターは答えない。
『どちらの飲み物を所望致しますか？』
同じ事を繰り返す。これには赤外線センサーがついていて、前に立った人間が分かるらしい。
「えーっと、紅茶とコーヒー」
『かしこまりました、紅茶とコーヒーをお出しいたします』
「早くしてね」
瑠華はそういい、自動販売機の横のベンチに座る。この学園はどこにでもベンチがあるらしい。この無駄に金をかけてる自動販売機は早くて五分かかる。とにかく遅いのだ。
瑠華はベンチに大またで座る。
「ったく・・おそいなぁ・・」
風が強い。草木が激しく揺れる。
「何が？」
「何って自動販売機だって・・・・・え？！」
瑠華は背筋を正して目の前をじっと見る。強風が止んだ瞬間に、前に誰かが立っていることが分かった。
「女の子は大またでベンチに座ったら・・駄目なんだよ？」
その言葉にさっと足を閉じる。
「ね、俺二年Ａ組行きたいんだけど、知ってる？」
瑠華はレナの言った言葉を思い出す。その男の顔がはっきりと見えた。
「情報」通りの、美形な男。茶色い髪に銀のピアス。背も高くて顔

立ちも整っている。
「・・・転校生？」
「そう。知ってるの？」
瑠華はベンチから立ち、いつものお嬢様スマイルで答える。
「えぇ。私も同じクラスよ・・・私の名前は宮塚瑠華。よろしくね？」
「宮塚？あぁ財閥の・・・。ふーん、あんたがアルテミスか、月の女神さんか」
この名前を聞いて動揺する様子を見せないとすると、結構な大金持ちか。
「あら、知ってるの？そんな名前・・・恥ずかしいわ」
「そ。俺の名前は東郷刹那。よろしくね、瑠華ちゃん」
「・・東郷？」
東郷といえば・・・東郷財閥・・・。
「あの・・・？」
「お、知ってんの？世間知らずのお嬢様が」
こいつ・・・頭にくる言い方しやがる・・。
「悪いけど、普通のことはしってるのよ」
「そうなんだ、ごめんね、瑠華ちゃん」
馬鹿にしてやがる・・・。
　東郷財閥は、宮塚財閥と競っているライバルだと父には聞いている。まぁ、つまりは御曹司ってことか・・。
「えぇ、そうなの。じゃあクラスでまた会いましょ」
自動販売機から飲み物を取り出し、さっさと去ろうとする瑠華をじっと見つめ、刹那はにやりと微笑む。
「ねぇ・・・お嬢様の姿、かぶってて楽しい？」
瑠華はぴたりと足を止める。
「え？」
「大またでベンチに座ってる子が・・・本当のお嬢様だとは思えないなぁ」

「・・・何が言いたいの？」
刹那はにこりと微笑み瑠華の傍にいく。
「おもしろいねって、言ってんの」
そういい、刹那は瑠華に顔を近づける。
「なっ・・なっ、なっ・・・」
瑠華は驚いて顔を真っ赤にする。
「いいじゃん、ほっぺにキスぐらい」
「なっお前・・・」
「あっお前っていったぁ」
瑠華はぐっと口を強く閉じる。刹那はやさしげに微笑み、手をふる。
「ふふ・・じゃあね、瑠華お嬢様・・。俺明日入学だから、またね」
刹那はそのまま消えていった。
瑠華は頭が真っ白だ。『お嬢様』じゃないってばれた。しかも・・・
「・・・あの野郎・・・きっききキスまでしゃがって・・そりゃ頬だけど・・・！」
瑠華は雄叫びを上げる。
「くっそぉ・・ゆるさねぇ！」
瑠華は手に持った少し冷めたコーヒーを一気に飲み干し、もう一つの紅茶を急いで持っていった。
　これから・・大金持ち達の格闘は始まる・・・。

NO．5『やな奴1』（前書き）

これは1・2と続きます。

NO．5『やな奴1』

次の日の朝、聖薔薇学園の二年A組はざわついていた。その理由は、瑠華が不機嫌だったからだ。席に座り肘をついている。
「おっおい・・・瑠華さんがまたご機嫌がななめでいらっしゃる。僕達でなんとかしなければいけないんじゃないか？」
「そうね・・あの人の機嫌を悪くしたら私達はこの学園で生きていけないもの」
A組の人間は口々にそう言いだす。
「ねぇ、どうしたの。瑠華。昨日から変よ？」
レナは気遣ってくれているが、瑠華の苛立ちは納まらない。なんたって今日あの東郷刹那というとんでも無い奴が転校してくるのだ。
「ったくそれだったら始業式の日に来いっての」
「え？」
「いや、なんでもない」
瑠華は小声でそういう。もちろんこんな会話を取り巻き達に聞かれるわけにはいかない。
「はい、皆様おはようございます。今日も何事もなくおこしになられたでしょうか」
担任のエレーナという外国人っぽい先生が入ってくる。だが外国人っぽいのは名前だけだ。顔は普通に三十過ぎの日本人のおばさん。
それだけの事が今日の瑠華には癇に障った。じろりと睨むとエレーナは場が悪そうな顔をし、金色の髪を触りながらさっさと話し始める。
「えぇっとですね、今日は転校生がいらっしゃいます。編入テストではなんと五百点中、四百九十三点を出しました」
周りがざわつく。瑠華も同じように驚いて目を大きく開ける。その点数は瑠華とまったく同じだったのだ。
「では、ご紹介します。名前は、東郷刹那さん」

そのエレーナ先生の声と同時ぐらいに扉が開く。瑠華が昨日見た通りの茶色い髪に銀のピアス。そして
整った顔。
クラスの女子は声を上げる。顔を赤くしてひそひそと話し出す。
「今ご紹介いただいた通り、東郷財閥の東郷刹那です」
自分でわざわざ言うか？
瑠華は呆れてじっと刹那を睨む。
「それでは、東郷さんはどの席に」
エレーナ先生がそう言った時、瑠華は刹那とばっちり目が合ってしまった。
「俺、瑠華さんの隣がいいです」
瑠華は特別扱いで一番後ろの席に一人だ。その横に少し離れてレナがいる。席順だけでも扱いの違いは明らかだ。
「えっ、宮塚さんの？」
「駄目？先生。いいよねぇ、瑠華ちゃん」
周りの目が一斉に瑠華の方を向く。
なんで隣に来るんだよ。
瑠華は心の中の声を必死に抑える。なんたって秘密を握られてしまったのだ。
「あら・・よろしくてよ、私はね。でもなぜ私の隣になど来たいのですか？」
「そんなの、美人が隣に居た方がいいからに決まってんじゃん」
瑠華は少し顔を赤くする。こんなの正面から言われたの初めてだ。
普通でも相手からの告白は少ないのに。
「それはどうも」
「じゃ、決まりね」
刹那はかばんを瑠華の隣の机に置く。
いつもは物置にしてるのに、と瑠華は思いながら荷物をどける。
「よろしくね、偽瑠華ちゃん」
小声で耳元でそういうのだ。瑠華は殴ってやろうかと思いながらも

笑顔で答える。
「えぇ、これから長い付き合いになるわね・・・刹那君？」
冷ややかに瑠華が言うとなぜが刹那は爆笑し、腹を抱えて机に顔を付ける。

NO．5『やな奴1』（後書き）

刹那・・。ちょっと自己中に書きすぎてしまったかな？
まぁ、かっこいいから許すけど（多分ね）

NO．6『やな奴2』

「ちょっと、そんなに笑わないでよ」
瑠華は慌てて止めるが刹那は笑い続ける。
エレーナ先生は何事もないように授業を始めだす。この学園では先生に権限はないのだ。
「あぁ、おもしろかった。でもさ、この学校って先生何も言わないんだね」
瑠華はその質問に平然と答える。
「何言ってんの？当たり前でしょ。先生は何もいえないわよ。特にあたし達みたいなんにはね」
「へぇ。変わってるね」
「変わってる？普通でしょう」
刹那はしばらく黙り、そうなの？とだけ言った。
「あんたこそ変わってるわよ。そんな考え、この学園にはないし」
「あ、もう言葉遣いは気にしなくていいの？」
はっと我に返って普通の言葉で話している自分に驚く。
　なんか、この男としゃべっていると全身丸裸にされたような感じがする。
「うるさいわね、それよりなんであんたはこの学園に転校してきたのよ」
「してきちゃ悪いの？」
瑠華はなんとか拳を振りかざすのを我慢する。それより瑠華は刹那の言葉遣いが気になっていた。普段も口が悪いみたいだし、東郷の跡取りがそんなことでいいのか、と思う反面羨ましい。
「別に、いいけど。それより、あんたその言葉遣いいいの？」
刹那は意味深に微笑み何が？と答える。この言い方がむかつくのだ。
「だから、あんたお坊ちゃまなのにその感じはいいのかって言ってんの。いちいちむかつくわね」

「別に？注意されたこともないし？俺は俺の道を生きるからね。でも瑠華ちゃんは違うみたいだね。親の言うとおりにしといて楽しい？俺はやだね。操り人形なんてさ」
胸に突き刺さるような痛みが瑠華を襲った。本当のことを言われると案外きつい。
しかもこいつ、性格悪い。サドか、こいつ。
「・・・悪い、ちょっときつい言い方しちゃった。瑠華ちゃん可愛いから」
「は？」
何、突然言ってきてんだと瑠華はまた呆れる。本当に分からない奴だと瑠華はよく分からない感情に捕らわれていた。
「ごめんね、瑠華ちゃん。許してよ」
「許すとかそんな問題じゃないんだけど」
「あら、そうなんだ。じゃあ許してくれてるんだね。ありがと」
「そりゃ、どう致しまして」
だんだんめんどくさくなってきた瑠華はさっさと話を終わらす。
「冷たいな。でも俺、そんな瑠華ちゃん好きだよ。まぁ噂とはまったく違うけどね。噂を聞いた時別にどうでもいいって思った。でも、あの大またで座ってる美女を見た瞬間、俄然興味がわいたね」
「おっ大また大また言うな。あれはたまたまで」
瑠華が慌てて反論するが、刹那はため息をつく。
「あのね、気にするとこそこじゃないんだけど」
「え？何よそれ」
「俺が瑠華ちゃんを好きって言うこと。ね、俺と付き合ってくれる？」
また突然な。殴りたい。
「無理」
一言そういうと刹那はえーっと小さく言う。
「えー残念」
全然残念がってないし、と瑠華は肩を落として刹那を睨む。

「あんたなら女ぐらいいっぱいいるでしょ」
「そりゃあ、経験豊富ですよ？俺は。だから俺の相手してよ、瑠華ちゃん」
「絶対に嫌！」
今の一言でまったくその気がなくなった。いや、その前からなかったけれど。
「ただの遊び人？」
「当たり。なんなら試してみるか？瑠華お嬢様」
「お坊ちゃまに言われたって嬉しくない」
そらそうだ、と笑う刹那はなんだか子供のような笑顔だった。話してる内容には沿わないような、明るい笑顔。こんな顔を人前でも出来るのがとても羨ましい。
瑠華の場合、お嬢様スマイルで会釈し、にこりと微笑みながらその相手の話を聞き続ける。それが、両親に教わったことだ。この男だって、ちゃんとしたとこではもっときっちりしているのだろう。けれど、瑠華はこんな校内の中で大笑いできるこいつが羨ましい。
「どしたの、重い感じになっちゃって」
「何にもないわよ」
瑠華の声は一時間目のチャイムに重なり、消えていった。A組の連中はすぐに刹那の元へ駆け寄る。断然女子が多い。
瑠華は席から立ち廊下へと出る。刹那に興味の無いのか、瑠華に一途で自分の株を上げようとしているのか知らないが、少数の取り巻きがついてくる。そしてその後ろからレナがついてくる。
「どうしたの？やけに転校生と楽しげに話してたけど」
レナの言葉に瑠華は立ち止まる。
「楽しそう？！何言ってんのよ、ありえないわ」
「少なくともいつもよりは楽しそうだったわよ？」
いつも、というとあの取り巻きと話している時か。
「とにかくあたしはあんな奴大嫌いなの！」
瑠華は小声でだが、感情をこめて強く言った。

すると、廊下を歩いていた瑠華の目の前に、これまたややこしい奴が現れた。
「うわ」
瑠華はもうやめてくれ、という風にその先にいる女子を睨んだのであった。

NO．6『やな奴2』（後書き）

さて、その先にいた女子は誰でしょう？（笑）

NO．7『ライバルな姫君』

「ちょっと、瑠華。めんどくさい人が来たわよ」
レナはぼそりと瑠華に耳打ちをし、瑠華は頷く。もう絶対会いたくなかったあの女が目の前に現れた。
嫌味に取り巻き多くしやがって。
瑠華はにこりと微笑み、軽くお辞儀する。
「あら。居たのね瑠華さん。取り巻きが少ないからどこぞの貧乏お嬢様かと思ったわ」
「あなたも相変わらずで」
「うるさいわね」
この超がつくほど自己中心的なお嬢様。名前は華道夕維。赤い血のような髪と、その残虐さでついた別名『血の姫君』。三年Ａ組の瑠華と同じクラスのお嬢様だ。まぁ一応年上だからこんな嫌味も黙って言わせている。
「それで、何か御用で？」
「あなたなんかに用なんてなくてよ。あぁでも、今度の『美コンテスト』楽しみね。今度こそ・・私が優勝いたしますわ。覚悟しておくのね」
「美コンテストね・・」
結局それを言いに来たのか。
瑠華は呆れてはいはい、と手を振った。
「まっなんですの、その無礼な態度は」
「あいにく、私に無礼もくそのないのですよ。優勝は、渡しませんよ。夕維さん」
夕維はまるで鬼のような形相をする。周りの取り巻きは怖くて何もいえないらしい。
「ふん。そういってられるのも今の内よ、瑠華さん。あなたなんかに絶対渡しませんから」

そう捨て台詞を残し、魔女のような高笑いを残して消え去った。
「あいかわらず高飛車な奴」
瑠華がそう言うとどこかで笑う声がした。その方向を見ると、やはり刹那だ。教室のドアの前に立ち
密かに笑っている。
「あら、刹那さん。何笑ってらっしゃるの」
「いや、女は怖いね。あれ誰？」
「・・三年A組の華道夕維さんよ」
「へぇ？そんな会社あったっけ。大して有名じゃないんだね」
　こいつ、そんなに笑ってられるほど金持ちか？
華道って言ったら瑠華と並ぶ世界的に有名な電気製品系の金持ちだ。
「あら、華道を知らないとはあなたも世間知らずのお坊ちゃまってことかしら？」
「冗談」
刹那はにやりと笑い瑠華の傍に来る。瑠華は少し下がってじっと睨む。
「君よりはあんなことやこんなこと、知ってるけどねぇ」
こっこいつ・・・！
瑠華は平手で刹那の頬を殴ろうとした。だが軽くその腕は止められてしまう。それがなんだか腹立たしくてつかまれたままの手を強引に振り解く。
「このプレイボーイ男」
小声でそういうと聞こえたのか、聞こえてないのかしらないが、にこりと微笑んだまま返答はない。
「さてと、その華道夕維ちゃん？落としに行こうかな」
「なっどういう意味よ」
「そのままの意味だけど？だって俺、プレイボーイだし。瑠華ちゃん落とせなかったし。それの身代わり」
「みっ身代わりって」
聞いてたのかと瑠華は刹那を睨むが刹那はやはり平然といいながら

廊下を歩く。
「だって、俺が落とせなかったの、瑠華ちゃんだけだもん。それって俺のプライドに触るし」
あぁ、腹が立つ。瑠華はここが何もないところだったらぶん殴っていただろう。
「夕維は気が強いわよ」
「なおさらオッケー。気が強い方が落としやすいよ？じゃあね、授業はさぼるし」
刹那はその台詞を残して、階段を上に上がっていった。本当に落とすつもりなんだろうか。
「しかも、落とすってなんなのよレナ、知ってる？」
後ろからレナはついてきている。金色の長い髪を揺らし、微笑みながら瑠華の傍へきた。
「何？瑠華」
「いや、なんでもない」
やっぱりやめておこう。瑠華は一人で納得し、教室へと戻る。
「え？ちょっと、瑠華？どうしたのよ」
「何にも無いって。さ、行こレナお嬢様」
瑠華はレナに手を差し伸べる。
瑠華にそう言われ、レナは嬉しそうに頬を赤らめ天使のような微笑みをしながら、瑠華の差し伸べた手を取った。

ＮＯ．７『ライバルな姫君』（後書き）

次回はとんでもない「美コンテスト」の始まりです。
あと刹那は夕維を落とせたのでしょうか。いや、落とせてたとしても、きっと瑠華には言わないでしょう。その理由は・・・まぁ、楽しみにしてくださると嬉しいです。

NO．8『美コンテスト1』

「美コンテスト・・・それは、究極の美を求めるコンテストなのですっ！みなさんも大いに参加してくださいませ」
夕維が瑠華に宣戦布告した次の日のホームルームの時間。
二年A組の委員長である、黒く長いストレートな髪を三つ編みに結んだ松岡久美子が教卓に立ち、クラスのみんなに呼びかける。
そう、もうすぐあのコンテストが開かれるのだ。あれはむしろコンテストというか、競技。金持ちたちの醜い争いが起こるのである。それを知っている瑠華はあまり乗り気はしない。
「なぁ、美コンテストってなんなんだ？」
瑠華の横の席で、うつぶせになったまま刹那は瑠華に問う。
「美コンテスト・・なんて美しいものじゃないわよ」
「何、それ」
「まぁ、あの委員長の話聞いとけば分かるわよ」
ふーん、と頷き、そのまま前を見る。
「参加は自由ですが、宮塚様っ！あなた様は出ていただけますよね？」
久美子は瞳を輝かせて瑠華をじっと見つめる。
「あら、なぜ？」
「なんたって宮塚様は去年のクイーン。結局、男子の方は宮塚様目当てで乱闘騒ぎになって決まりませんでしたけど」
「クイーンって？詳しく教えてくれない？委員長」
刹那がにこりと微笑みかけると久美子は頬を染めながら淡々としゃべる。
「はっはい、まずこの美コンテストではクイーン、キングの二人を決めます。そしてその二人はドレスやタキシードを着てお写真が撮れるのです」
「へぇ、じゃあ瑠華ちゃんがクイーンになったら、他の俺以外の男

子が瑠華ちゃんと撮るの？」
　そんなことどうでもいいでしょ、と瑠華は目で訴えるがまるで見もしない。
「はっはぁ、そういうことになります」
「それはやだな。夕維ちゃんなら、まだいいけど」
　夕維ちゃん？こいつ、一日でそんな名前で呼べる関係になったのかよ。
「そっそうですか。ではルールを説明します」
久美子委員長はさっさと方向を変える。
「ルールは簡単。美コンテストです。まず参加者の中で誰が美しいかを決めます。それは一位から二十位まで決めます。そしてその二十人の中であるゲームをしていただきます。そして・・」
　そう、ここからが大変なのだと瑠華は去年を思いだす。
「そのゲームは・・お化け屋敷とサバイバルゲームが混ざった超恐怖ゲーム。あっ、お化け屋敷というのはですね、調べたところ、なにやら布をかぶった人が出てきて、人に恐怖の概念を植えつけるというものらしいです」
　調べたのかよ。瑠華は呆れる。まぁ、一生懸命なことだ。
「そしてサバイバルゲームというのは、深い森の中へ入っていき、敵を抹殺するというゲームです」
　クラスからはえー、怖いという悲鳴が聞こえてくる。
　まぁ、普通は金持ちなどとは縁の無い話だ。
「クイーンとキングには誰がなるかは分かりませんが、キングかクイーンになると学園ナンバーワンの称号を得ることが出来ます」
　「学園ナンバーワンねぇ。瑠華ちゃん、よくそんなコンテストに出たね。ってかどこがコンテスト？」
「無理やりに決まってるでしょ。なんか、お化け屋敷とかの恐怖にも顔を崩さず冷静にお嬢様をみせれたらいいんだって。そういう意味の美コンテストよ。ちなみに去年は銃をつかった殺し合いだったわ」

「さすが、瑠華ちゃん。そういうの得意そうだものね」
「どういう意味よ。まぁ普通のお嬢様よりは出来るけど。あとはあの夕維さんね。あの時もものすごく怖かったし」
刹那はくすっと笑い、確かにと言った。
「ねぇ。夕維さんといつからそんなに仲良くなったの」
「言っただろ。落とすって」
「落とす？前から思ってたけど落とすって何よ」
刹那は少し驚いたように顔を顰め、にやりと意味深に微笑む。
「そういうとこは疎いんだ。そんなとこはお嬢様だね」
「悪い」
「全然？そんなとこがまたいいんだよ」
「あのね。話しそれたわよ。どうなのよ、落とすって」
刹那はぐいっと瑠華と引き寄せ、耳元で何かしゃべる。
「それはね・・・。俺に惚れさせるってこと。瑠華ちゃんも仲間に入る？」
「こっの・・」
大声を出そうとしてぴたりとやめる。全員の目が瑠華と見ていたのだ。瑠華はわざと咳き込み、にこりと笑った。
「気にしないで下さい」
そういい、刹那を突き放す。刹那はちぇっと舌打ちをし、また机に寝そべる。
「あんたって、ほんと最低」
「そりゃどうも。でも惚れられるんだからしょうがないじゃないか」
この自意識過剰。
ここの中で思ったことなのに、刹那は察知したのか、ありがと。と小声で言った。

本当に、よく分からない男だ。ただの女好きか、それとも何かあるのか。だが今のところはただの女好きにしか見えない。

「あ、俺そのコンテスト出るから」
寝そべったままそう言ったので、本気かは分からないが、その言葉を聞いた瞬間、瑠華は刹那の頭を拳骨で殴った。

NO．8『美コンテスト1』（後書き）

次はこんどこそ、美コンテストの始まりです。
夕維と瑠華と女の争い。（夕維は刹那をかけた戦い）
レナもお嬢様の割にはがんばってます。
次回、お待ちくだされ・・。

NO．9『美コンテスト2』

「瑠華ちゃん。帰り、どこか寄るの？」
瑠華はびくっと体を凍らせて、後ろを向く。
くそ。さっさと帰ろうと思ってたのに。
「関係ないでしょう、刹那さん」
「いいじゃないか。色々と知ってる中だもん、ね？瑠華ちゃん」
「何もないわよ」
刹那は耳元でぼそっと言う。
「いいの？言っても」
まじで、うざい。
舌打ちをし、瑠華は刹那ににっこりと微笑む。その微笑が怖かったのか、刹那はたじろぐ。
「悪いですけど、私は一人で買い物をしたいのです」
「買い物？どこに行くの？」
「聞いてないわね・・・。あんたには関係ないってば」
「いいじゃんいいじゃん。さっ行こ。じゃあみなさんさようならぁ」
刹那が手を振ると周りの人間はすぐにお辞儀する。
「さようなら、宮塚様、東郷様」
取り巻きたちはさっと身を整え、声を張り上げる。瑠華も軽く微笑み、刹那はにこりとして手をふった。

「ほんと、変わってるよなこの学園」
「美コンなんかがある時点で変わってるわよ」
つんと瑠華は早歩きのまま答える。それでも刹那は喋り続けながら同じスピードで歩いてくる。
「ちょっと、ついて来ないでよ。あんた車は？」
「用があるから来なくていいって言った。なぁ、何買いに行くんだ

よ」
「・・別に何も」
「あ、分かった。美コンのための服だろ」
瑠華は急に立ち止まる。
なんでばれてんのよ・・。
「なんで知ってんの」
「分かるって、普通に」
大通りを抜けたすぐ近くに、瑠華の行きつけの服屋がある。もちろん、高級ブランドが売っている場所だ。そこはセレブが通う、セレブの街だ。聖薔薇学園から徒歩で十分。車を使うのもめんどい瑠華は、歩きで来ることが多い。
「へぇ、こんなとこにあるなんて知らなかった。知ってる人は、知っている店だね」
周りを見渡し、感心したような顔をする刹那を、瑠華はほっといて店へと入る。
「あっ・・いらっしゃいませ、宮塚様。ご来店有難うございます」
店員や店長までが瑠華を見た途端、顔色を変えたように傍に駆け寄る。
「そちらは・・・」
店員の一人が刹那の方をちらりと見て問う。
「あぁ、これは東郷財閥のお坊ちゃんなの。まぁ、気にしないで」
「まぁ、東郷財閥?!それはそれはようこそいらっしゃってくださいました。どうぞご自由に見回ってください」
「ありがとう」
いつもの御曹司ススマイルをすると、店員は頬に手を当てて眺める。
「今日はちょっとドレスを買いに来たの」
瑠華の言葉で元に戻った店員たちは急いで探し始める。
「ドレス、でございますか」
「そう。とっておきのね。色は、白。アクセサリーは金。選んでくれるかしら」

「かしこまりました」
そういい、店員五人は慌ただしく店内を探し始める。
ここいいね。なんか雰囲気が。綺麗だし」
刹那は満足そうに傍にあったソファに寝転ぶ。瑠華はあっそ、と小声で言って、じっと店内を見つめる。
「こちらはどうでしょう。有名なデザイナーが作ったパーティドレスです。色も純白ですが。レースはアメリカのデザイナーが限定品として作ったものを使用している、当店一番のものでございます」
「ひょー。まるでお姫さんだね」
「あなたは黙ってて」
瑠華がぴしゃりと言い放ち、ドレスをじっと見る。確かに、いい素材だ。ドレスにも宝石がちりばめられている。
「ついている宝石はなになの？」
「もちろん、ダイヤでございます」
「へぇ」
さすがの瑠華でも見入ってしまう。まさに最高のドレス。最高の作り。
だが、これを着ることに抵抗は瑠華にはない。たまにお嬢様にはあるが、最高のドレスを着ていても、それに見合う自分の価値というものを知っていなければならない。いくらいいドレスを着たって、そのドレスに自分が負けていれば意味がないのだ。
それでも、瑠華はこんなものを買うのだ。それは、自分の価値を、分かっているから。
「じゃあ、これでいいわ。アクセサリーは？」
また店員たちが騒ぎ出す。
「さすがだね・・瑠華ちゃん。そのドレス買うなんて」
刹那はにやりと笑いながらソファから腰を離す。
「悪い？これでも私は自分の価値、知ってるのよ」
「それはそれは。ますます君が好きになるよ。自信がある女の子は好きだからね」

「あんたが相手してた女と一緒にしないで」
「それはすまない、姫様」
そんなことを言ってる間に店員が瑠華の方へ歩いてくる。
「ネックレスと、指輪とブレスレットでよろしかったですか？」
「えぇ、いいわよ」
「それでは、こちらは。これもダイヤのネックレスです。六カラットのダイヤを一個、後はすべて三カラットです」
「ぜんぶで何個？」
「十五個でございます」
それはそれは。
金色の紐に、真ん中に六カラットのダイヤ。その周りに三カラットのダイヤがちりばめられている。
もちろん、普通では買えない品物だ。
「まぁ、それでいいわ。後は適当に入れといて。ああ、ネックレスはこれでいいけど、ブレスレットは三つ、指輪は二つね」
「分かりました、宝石はどれに」
「ダイヤメインで、ルビーとサファイヤでいいわ」
「かしこまりました」
店員はいたって普通の営業スマイルをし、他の店員に包みを指示する。
「おい、いいのかよ。店員に選ばして」
「めんどうだもの。ここの店員はちゃんとあたしに合ったものを選んでくれるわ。だからよ」
刹那はへぇ、と感心する。
「お会計失礼します、お値段は・・こちら・・・・でございます」
「なっ高！！」
瑠華ではなく、刹那が叫ぶ。まるで庶民の反応だ。瑠華は少し恥かしそうに睨み、カードを出す。
「そっそんなに服にいるのかよ」
刹那は呆れ顔だ。

「男には分からないでしょうけど、女の服は金がかかるのよ」
「たかが美コンに億単位かよ」
「悪い？負けるのだけは、プライドに触るの」
刹那はじばらく沈黙し、ふふっと笑い出す。
「確かに、瑠華ちゃんらしいな」
そうして、億単位の金を支払って、瑠華達は店を出たのであった。

ＮＯ．９『美コンテスト２』（後書き）

何円払ったかは・・ご想像にお任せします（笑）

NO．１０『美コン３』

ついにやってきてしまった。美コンテスト。金持ち達のサバイバル・・・。

瑠華は黒いベンツの中でなにやら考えていた。

「母さんに、言われたしな」

そう、今日の朝、美コンテストを迎えるということで、母がまた部屋に入ってきたのだ。普段あまり入ってこないのだが、何かの始まりなどにはよく入ってくる。

『瑠華、私楽しみにしてるのよ？見にはいけないけど、ちゃんと一位になってくるのよ？』

あの言葉が、重い負担となってしまう。分かってはいる。なんたって宮塚の一人娘なのだから。世間からは完璧として扱われているのだ。きっちりと、一位をとらなければ。

瑠華はベンツから下り、深呼吸をする。

周りはいつものように瑠華を見ると、道を開け、口々に挨拶をする。

知的でクールなイメージを持つ瑠華は、叫んだりしては絶対にならない。いつでも表情を崩さず、冷静に判断しなければならない。

「おはよう」

その一言だけで、周りは和やかになる。特別明るいムードはいらないのだ、瑠華には。

だが、後ろのやつにはいるらしい。

「おっはよう、みんな」

その言葉に女子は声を上げる。

「キャー、刹那様、おはようございます！」

瑠華は後ろのざわついた空気を気にしないように歩く。だが、刹那は瑠華の隣に来てにこりといつものスマイルを向ける。

こいつも、みんなの前では猫をかぶっている。女好きだが、やさ

しい王子様。それを演じているようだ。
「あら、おはよう刹那さん。今日は美コンテスト・・楽しみね？」
「そうだな、まぁ、瑠華ちゃんが優勝してクイーンになったらキングは俺に決まりだね」
「がんばって」
笑顔を見せず、瑠華はさっさと歩く。今はそういうキャラなのだ。
さっさとどっか行ってよ。
内心はそう思っていた。
「ちょっと、刹那君。そんな笑いもしない子のなんかといて楽しいの？」
また来た。
瑠華は思わずため息をつく。周りはよほどこわいのか、挨拶もせずにその場から離れていく。
「やぁ、夕維ちゃん」
刹那はにこやかに挨拶する。
「ちょっと瑠華さん。優勝はこの私のものよ」
「まぁ、お互い頑張りましょう」
「あなたは頑張らなくていいのよ」
「手は抜きませんよ」
瑠華は冷たい微笑みを浮かべ、早歩きで校舎の中へと入った。
彼女も所詮、世間知らずのお嬢様だ。彼女は知らない。この世がそう簡単にはいかないことを。自分が言えば、何もかも出来るとでも思っているのだろう。

「何よ、あの態度は」
夕維は鼻をならし、刹那の方へと歩き出す。
「ねぇ、刹那君。もちろん私に票を入れてくれるわよね？」
刹那は夕維の目の前に立ち、しばらく考えにこりと微笑む。
「悪いけど、俺がクイーンにしたいのは、あんたじゃないから」
「なっなによそれ」

夕維は混乱したように刹那の腕を握る。
「だっ誰よ、その人」
「夕維ちゃんより綺麗で、賢くて、でおもしろい人」
その言葉に夕維は思い当たる節があったのか、刹那を思い切り睨む。
「・・瑠華ね」
「分かってるならわざわざ聞かないで。ねぇ、俺調べたんだけど、君、この前の美コンテストで、瑠華ちゃんに卑怯な手使ったんだって？」
「なっ卑怯って・・」
「他のボディガードに襲わせたんだって？瑠華ちゃんを」
夕維はまるで信じられないという風に後ろへと下がる。
「まさか・・私に近づいたのって」
「そ、情報を得るため。じゃなきゃてめぇみたいなのに近づくわけねぇだろ。ねぇ、夕維ちゃん」
刹那は今まで見せたこと無いような冷酷な顔をし、夕維に詰め寄る。
「今度、瑠華ちゃんに何か卑怯な手、使ってみろ。あんたの華道。俺が全力でつぶしてやる」
そう言い放ち、にやりと笑った姿はまるで悪魔。人一人殺していそうな殺人者の顔。
「じゃ、ね。夕維ちゃん。美コン、がんばろーね」
にこりと元通りの笑顔で夕維を見る。だが、もう夕維に笑うことは出来なかった。その場に立ち尽くし、動けなくなってしまっていたのだった。

NO．11『美コン4』

空砲の音が、聖薔薇学園内に鳴り響く。
「それでは！ようやくはじまりました、第七十回美コンテスト。今回の出場者は八十五人！果たしてキングとクイーンになるのは誰でしょうか」
アナウンスが流れ、参加者は着替えの場所へと進む。一般の参加者は特別のチケットがなければ入れないようにしてある。じゃないと大騒ぎになってしまうからだ。
特別のチケットの枚数は全部で五十枚。このぐらいなら騒ぎにはならないだろう、とされた。
「瑠華様っ！こっち向いてくださーい！」
それでも一般人はカメラ片手に騒ぎまくる。着替え室へ向かおうとしていた瑠華は、軽く微笑みを返す。それだけで男女関係なく声を荒げる。
まるで、芸能人の握手会だ。
周りの人間に道をあけられながら、真ん中を通っていた瑠華の目に、夕維の姿が瞳に映った。当然、何か言われるだろうと覚悟をしたが、夕維は瑠華の姿を見ると、まるで逃げるかのように去っていく。当然理由なんて知らない瑠華は、よく分からなかったが、そのまま道を通って一番に着替え室に。そこにはそれぞれが用意したメイクアップアーティストや、スタイリストなどが辺りをうろついている。
「瑠華様、はじめましょう」
「えぇ」
そういい、スタイリストは、着々とドレスを着せる。
もちろん、一人一人個別の部屋だ。
外ではまだアナウンスが流れている。
「さて・・ただいま姫や王子様達はお着替え中です。もうしばらく

お待ちを・・・」
美容師が髪を結っている間に、スタイリストはドレスを着せる。瑠華一人に約五のスタイリストがつく。そのぐらい、大切に扱わなければいけないのである。ドレスも、瑠華も。
「それでは・・・できました。まぁ、今まで見た中で一番お美しいです・・」
スタイリスト達も驚き、その仕上げにうっとりとする。
「ありがとう」
瑠華は笑い、そのドレスのまま、外へと出る。この時にはもう、四十分は経過していた。だが、これはしょうがないのだ。
「でっでは、仕度が整ったようです」
司会者は待ちくたびれていたのか、少し木をむいていたらしく、チョーネクタイをきつく縛りなおす。
「まずはクイーン候補であり、昨年クイーンに輝いた、宮塚瑠華様の登場です」
司会者が名前を言った途端、一般人たちは歓喜の声を上げる。
「では、ご登場していただきます。宮塚様、どうぞっ！」
司会者の声と共に、瑠華はゆっくりと動く。その瞬間、空気が変わる。風向きまで変わった気がした。
他の影で見ていた参加者や、もちろん一般人も、言葉をなくす。誰一人、瑠華の姿から目を離せなくなっていた。
素人目にも分かる、高級なダイヤ。そして、漆黒の髪によく映える、細かいレースが使われた純白のドレス。
まるで、『異世界の住人』。
『アルテミス』の異名を持つ、聖薔薇学園の中で最も美人とされている、その真の姿が今公開された。
はっきりと、その力の違いを見せ付けただろう。
周りの参加者も戸惑うばかりだ。
登場から五秒後、一盤の客からは今まで以上の歓喜の声があげられた。

「いっいやぁ、さすがは、えっと、昨年のクイーンっ！すばらしいです。なんというか、言葉が見つかりません」
司会者、仕事しろと瑠華は横目で睨んだ。

瑠華が一番目立っていたせいで、他の参加者を見てもいまいち迫力が感じられないと思うのは無理ない。
「瑠華、すごかったわぁ」
レナがドレス姿のまま、瑠華へ飛びつく。
「ありがと。レナも可愛かったわよ」
桃色の妖精のようなドレスに、金の髪はよく似合う。瑠華はこういう可愛らしいのが好きだ。着ようなんて思わないが。これはレナが着るから可愛らしいのだ。
「これでこのコンテストでは瑠華が一位に決まりね。男子の方はどうなのかしら」
男子、ね。
「さぁ」
本当は分かっている。あいつだろう。投票なのだから、決まってる。そんな瑠華達の所に、アナウンスの音が聞こえる。
「王子様のコンテストの結果では、一位東郷刹那様ですっ！いやぁ、さすがですね。姫様の方は、これはもう誰も反論できないでしょう。あのドレスを見事に着こなした、宮塚瑠華様ですっ！」
その声とともに、一位である、瑠華と刹那は舞台へと上がる。
お互い微笑みあってお辞儀をする。隣同士になった時、刹那はぼそりと小声で瑠華に問う。
「さすがだね。あれ見た途端、俺言葉失っちゃった」
「あっそ」
「冷たいなぁ」
「なんであんたも一位になってるのよ」
刹那は得意げに笑う。
「俺以外に、一位取れると思った？それこそありえないでしょ」

出た、自意識過剰。でもこれを言って別に変に思わないのが逆にむかつく。
「この後のサバイバルゲームとお化け屋敷・・・絶対に負けないからね」
「まっ、男子と女子で違うからさ。お手柔らかに。きっとクイーンになれよ、俺もなるからさ」
そういい、瑠華の手に口付けをする。その場面を見た客は大騒ぎだ。だが泣く人間はいなかった。それは相手が瑠華だったからだろう。
瑠華は怒りを胸の中へ押し込め、にこりと笑った。
「がんばりましょう」
そのいい、向きを変え、舞台裏へと向かった。

「予想どうりね」
女の声が、暗い倉庫の中を響き渡る。
「やはり、あいつが一位だったわ、宮塚瑠華」
次に男の声が聞こえる。
「どうします？やりますか？」
「いえ、いいわ。今回は一位にさしといてあげる。美コンテストなんかで私の価値は決まらないわ。お楽しみは後半からよ」
にやりと笑い、女は男に指示する。
「あいつは？夕維は？」
「今は特に何も」
「あいつも使えないわね。いいわ、処分して」
「ですが、華道をつぶすのはおしいかと・・・」
その瞬間、大きな物音が響き渡る。
「・・私に、口答えする気？」
男は腹を押さえながら深くお辞儀し、申し訳ありません、とだけ言

う。

「待ってなさい・・・瑠華。あんたには苦痛を味合わせてあげる」

女は甲高い笑い声を残し、倉庫から出て行った。

ＮＯ．１１『美コン４』（後書き）

あれは誰でしょうか？その正体はもう少ししたら分かってきます。
次回はお化け屋敷とサバイバルゲーム。ですが、そんなに簡単には行きません。次はどんな事件が待っているでしょうか？お楽しみに。

NO．12『美コン5』

「・・・えぇっと、刹那さん。これはどういうことかご説明願いましょうか？」
眉間にしわを寄せた瑠華は、王子様スマイルで済まそうとする刹那にくってかかる。だが今は取り巻きが後ろについている。ここで殴り倒すわけにはいかない。
「何って、何が？」
「だから、今からお化け屋敷というゲームなのだけれど、あなたのせいで行けないと言っているの」
聖薔薇学園二階、二年Ａ組の教室の前で、瑠華と刹那は微笑みあっている。それが他の人間には怖くてならない。なんたって刹那の方は無邪気に笑っているが、同じく笑っている瑠華の顔は、明らかに切れている。これ以上怒らしたらたぶんこの教室は破壊、だ。宮塚財閥の娘を怒らしたらこの世の終わりとも言われているのだから。
が、その横にいる男も瑠華と同じ地位の男。宮塚に並ぶ財閥、東郷の御曹司である。だから、この状況を他の誰もとめられる事はできない。
「あのね、刹那さん」
「何？」
「近いのですわ、顔」
「なんで」
「それは・・・私の方が聞きたくてよ」
周りは冷や汗を流しながら見守る。
「なーに、してるの？瑠華、東郷君」
瑠華は救いの天使を見つけたように、声の方を向く。
「レナ！」
刹那はちっと舌打ちをし、にこりと微笑む。
「それでは、瑠華ちゃん？またお化け屋敷でね」

「二度と会いに来てくれなくてけっこうよ」
その言葉にまた周りの人間は固まる。
「もう、瑠華ったら、そんな怖い顔をしてはなりませんわよ。私は瑠華の笑顔が大好きなんだから」
その言葉に瑠華も、周りの人間もほんわかとした空気になってしまう。
そう、もはや最強な存在、西園寺レナ。こちらも瑠華と刹那の後に続く金持ちだ。そして、瑠華の秘密を知る唯一の大切な友人なのだ。
「もう、なんで突き飛ばさないの？」
もちろん小声でだが、レナは不思議そうに瑠華を見ながら問う。
「馬鹿言うなよ、こんなとこで突き飛ばしたりしたらそれこそ終わりだよ」
「東郷君は瑠華に気があるのかしら」
「まさか。あいつはただの女好きだよ。誰でもいいんじゃん」
「そう？瑠華にはなんかよく絡んでる気しますけど。それに、あんな状態で動けなくなっている瑠華を見たら、他の人間は幻滅したかもしれないわ」
確かに。
先ほどの現状は、刹那が瑠華に迫っていて、それをどかせようと頑張っていたのだが小声でばらすよ、と言われ動けなくなってしまっていた、もはや最悪の場面だったのだ。
「そうだけどさ・・まっいいじゃん。次のお化け屋敷を楽しもうよ」
その言葉を聞いた時、ほんの一瞬だがレナの顔が曇った。めったに見せない表情だったので、瑠華は驚いてじっと見てしまった。だがもう普通の顔に戻っていたので、安心したのだが、次の言葉で瑠華の不信感はさらに高まった。
「そうね。楽しみましょう。でも、そう簡単には・・・行かないかもよ」

その言葉がなんだか意味深で、よく理解できなかったが、瑠華は答える。
「そりゃあお化け屋敷だものね。でもたっ楽しみましょうよ、レナ姫？」
冗談っぽく言うと、レナはいつもの微笑で、えぇ、と言い、場所へ向かう。

だが、本当は楽しみになんかするとこじゃなかったのだ。この後のお化け屋敷も、サバイバルも。
この後、瑠華は信じられないことに遭遇するのだ、そして、過去を・・思い出してしまうのだ。
これは瑠華には忘れられないものになるだろう。
それがいいものじゃなくても。

NO．12『美コン5』（後書き）

ｈｔｔｐ：／／ｔｕｋｉｓｈｉｍａａｉｙａ．ｃｏｃｏｌｏｇ－ｎｉｆｔｙ．ｃｏｍ／ｂｌｏｇ／

→月夜、の小説のためのブログ作りました。

このアドレスを上の『アドレス（Ｄ）』って書いてるとこに貼り付けていただくと見ることが出来ます。

ぜひ、きてください（笑）

NO．13『お化け屋敷・・？』

「やだぁ・・・瑠華お姉さま怖いですわ」
数人の瑠華の後輩であり、そして宮塚の大切なお客様の娘達は、瑠華の傍にくっつきながらお化け屋敷という設定の部屋へと向かっていた。
　このお化け屋敷は一グループに約五人で十分間の間、広い館の中へと入る。
「大丈夫よ。何かあったら私が守ってさしあげてよ」
「本当に？瑠華お姉さまに守られるなら、私襲われてもよくてよ」
周りの後輩は口々にそう言いだす。瑠華は呆れと哀れみの瞳で後輩達を見つめる。
「お待ちしておりました、第六グループ様。この中は大変暗くなっておりますのでお気をつけて。あと、結構な衝撃を受けるかもしれませんので、注意してください」
入り口にいた案内役の男は微笑みながらそういう。後輩達は顔を青ざめ、不安そうに下を見る。
「大丈夫よ。あなた、そう人を驚かすものではなくてよ」
瑠華は男の方を向き、宮塚、ということを前面に出す。すると今度は男の方が顔面蒼白になり、すいませんと謝ってくるのだ。
「さぁ、行きましょう。私についていたら大丈夫よ」
瑠華は微笑み、後輩達の手を引く。
「はい、お姉さま」
安心したように胸をなでおろしながら元気よく頷き、五人は中へと入っていった。

「あのぉ、東郷さん」
一方男子の方では、刹那も同じようにお化け屋敷の中を回っていた。
刹那達は第五グループで、瑠華よりは先に入っていた。
「なんだよ」
刹那は不機嫌そうに答え、声のした方を向く。だがその不機嫌そうな顔に、他の男子はたじたじだ。
「なんで女子と合同じゃねーんだ」
刹那は一人でつぶやく。
そう、こんなゲーム、女子と同じじゃなきゃいみが無い。男子が一緒で悲鳴なんて上げてたらまさに笑いものだ。女子が悲鳴を上げて、それをかばったりするのがこのゲームの一番の楽しみなのに。
刹那が一緒に回りたいのはもちろん、瑠華。
「あっでも、あいつは悲鳴なんてあげねぇんか」
というか、逆に殴ってそうだし。
刹那は一人小さく笑う。
なんたって、あの宮塚のお嬢様だ。世界的に有名な、東郷と並ぶ名門。仲良くしていて損はない。見方につけておけば、これほど役に立つやつはいない、と。
あの瑠華に会うまでは、世間知らずのお嬢様を上手く丸め込んで、自分の手の内におさめようと思っていた。だが、噂とは遥かに違う、あの性格。
『東郷』という名だけで、周りは自分を見て見ぬふり。聖薔薇学園に来る前の学校なんて、普通の一般の高校だったら、周りは俺を見ない。先生は媚を売ってくるし、周りは俺をいないものとして扱う。万が一何かあったら済ませられないからだろう。
しかし、瑠華は違う。自分と同じ位置にいる人間、そして、あの物怖じしない性格。話していると心が安らぎ、なぜか安心する。
「ほんと・・・なんか予想外なことばっかりだよなぁ」

まさか宮塚のやつと、あんなに絡むとは。さっさと手の内におさめて、天下をとろうと思っていたのに。なぜかできない。
『冷酷な人間』。そういわれてきた刹那。なのに、それを瑠華に対してはできない。いつもおちゃらけた感じになってしまう。
「なんでだろ・・・」
刹那自身、まだ分かっていないのだ。
「しかし、あいつらどこにいるんだろ。おい！」
びくびくしている男子に怒鳴る。
「何分後に次のチーム入ってくるんだった？」
「え？えっと、五分後じゃ・・ないでしょうか」
五分ってことは、入ってきてからもう六分。ってことは。
「もう入ってるのか」
刹那は後ろをじっと見てみる。なんせでかい館だ。しかも廊下がとても複雑でよく分からない。

NO．13『お化け屋敷・・？』（後書き）

小説のブログのＵＲＬを変えました。
ｈｔｔｐ：／／ｔｕｋｉｓｈｉｍａａｉｙａ．ｃｏｃｏｌｏｇ－ｎｉｆｔｙ．ｃｏｍ／ｔｕｋｉｙｏ／
この小説のことについて書いてます。よろしければお願いします！！

NO．１４『甦る過去１』

「こりゃ会えないな」
遠い向こうの壁を、暗闇の中で感じながら刹那はつぶやく。
「待てよ？」
刹那は少し考え、その壁をじっと見てみる。
調べたところに寄ると、瑠華は去年襲われている。暗闇の中で。
それをしたのは夕維だった。だが一つおかしな点があった。それは、バックにもっと巨大なものがついていたということ。しかも、複数だったのだ。つまり、そいつらすべてが宮塚を狙っている。夕維はおそらくその下っ端だ。
「まさか・・・」
刹那は顔を上げ、何か思いついたように向きを変える。
夕維には釘はさしといた。でもそれはあまり意味のないこと。ましてやその上に居る奴らにはなんの関係もない。この『美コンテスト』は聖薔薇学園のイベントでも大きな方だ。
狙うなら、今・・・・。
その言葉が刹那の頭の中をよぎる。
「しまったっ！！」
刹那は血相を変え、辺りでうろついている男子達をのけて後ろへと全力で走る。
もしかしたら、間に合わないかもしれない。
そうも思った、が、なぜか体は自然と動く。まるで本能に、従うように。

「瑠華お姉さまっ！もう嫌です！」
入ってから約二分。もうこのお嬢様たちはびびって逃げ腰になってしまっている。

早いって。
瑠華は心の中でそう思いながらも後輩達の頭をなぜる。
「落ち着いて。十分の我慢よ」
そう言葉を発した時、左からお化け役の特殊メイクをした人間が出てきた。
周りの後輩はもう叫ぶしかない。泣き始める人もいる。
うざい。
「あんたな、こんなことしていいと思ってんのか。このお嬢ちゃん達をなかせるとはいい度胸じゃねーか。ちなみにあたしも切れ気味だから、あんまりこういうことしないほうがいいよ」
そう早口で言ってしまえばこっちのものだ。宮塚を怒らせることはあってはならない。ましてその宮塚の人間が早口でとてもお嬢様とは思えないような言葉を発しているのだ。向こうも言葉がでないだろう。その人間は何も言わなくなり、その隙に瑠華たちは通り抜ける。
入ってきて、一番に思うのは、やはり暗いこと。とにかく前が見えない。昔、家を抜け出して、遊園地に行ったことがあったが、その時に入ったお化け屋敷よりリアルに怖いかもしれない、と瑠華は少し慎重に足を進める。
「お嬢さん」
後ろで声がする。他の後輩は悲鳴を上げる。その瞬間瑠華はその声の方を向き、冷ややかに笑う。
「あんた、こんなことしていいと思ってるの？」
微笑みを浮かべてそう言うと、やはりもう手出しができない。
「ふん、つまんないの」
瑠華は独り言をつぶやく。
しかし、この暗闇は少し嫌いだ。過去にあったことを、思い出してしまうから。もう二度とあんなことあって欲しくないのに、なぜか不安が募る。お化けとかとは違う、人間の殺気。
瑠華は後輩たちより一メートルほど先にいた。

ほんの、一瞬の隙だった。後輩も、誰も見ていないほんのわずかな時間。瑠華はとっさに後ろを振り向いた。だが、遅かった。男が一人、瑠華の首に手を回している。

「なっ・・・！」

叫ぼうと瑠華は懸命に手を動かす。だが動かない。前と、同じ状況。それに、気をとられて一瞬判断が遅れたのだ。

過去ほど、怖いものはない。

瑠華はその時、そう思っただろう。

何個も部屋があるこの館の、一つの部屋へと引きずられる。

男は相当力が強いのか、瑠華がもがいても何も動かない。勢いよく投げられ、瑠華は尻餅をつく。

「てめぇ、何すんだよ」

つい男言葉になってしまう。だが、そんなことを選んでいる暇はない。

「こんにちは、宮塚さん。去年もこんなこと、ありましたよね」

男はにやりと笑い、瑠華の方へ一歩踏み出す。瑠華は壁にもたれ、身動きがつかない。

「あんた・・去年の？」

「さすが、怖がらないのはほめましょう。ですが、思い出したらどうなるか？去年。あなたはあまり深く考えないようにしていたでしょう。ですが、思い出してください？」

その男の声は、まるで催眠術のようで、自然と頭が動かなくなる。そして、過去の記憶が蘇ってきてしまうのだ。それが、瑠華が願っていることじゃなくても。

「・・やっ、やめろ！思い出させるな」

『思い出しては、駄目』

頭の中はそういっている。自分に、信号を出している。けれど、聞かない。脳が勝手にさかのぼるのだ、過去に。

NO．15『甦る過去2』

去年。
瑠華がまだ一年だった頃。もう、先輩までもが反論できなかった。完璧な頭脳。そして美貌。そして家柄。『宮塚』の人間ということで、周りからは媚びられ、お嬢様として扱われていた。それが、羨ましいと思う人間もいるだろう。だが、瑠華には邪魔な存在だった。普通の環境にどれだけ憧れたか。
「別に、美しくなくていい。金持ちじゃなくていい。もっと、大事な物が欲しい」
そう思うようになっていたのだ。だからお嬢様の生活から抜け出してみたり、男言葉を使ってみたりしている。まぁ、男言葉を使うのは、地なのだが。
そして、もう一つの難点。それは、宮塚の人間という理由が別の方向で関係している。世界的に有名となれば、潰そうとする輩もいる。
そして、瑠華が一年だった夏の日。事件は、おきた。

美コンテストの銃をつかった殺し合いのゲーム。もちろん、相手はコンピューター。普段ゲームセンターなどに行かないほかのお嬢様達は、相当苦労しただろう。だが瑠華は違う。何回も行ったことがあるので、多少は分かる。そして、見事クイーンに。
ちょっぴり浮かれて、微笑みながら、制服に着替えていると、数人の男が勢いよく入ってきた。瑠華は腹を殴られ、意識を失い、そのまま倒れこんだ。
よく分からない状況に戸惑いながら、何分かすると目が開いてくる。その時微かに聞こえた、女と男の声。
「・・・美コンでは優勝さして差し上げたけど、それで終わらないわ。馬鹿な奴。信じちゃってさぁ・・・。あんたなんか、大嫌い

なんだから」
確か、そう言っていた。視界はぼやけていてよく分からなかったからそれが誰だかは分からない。でも、向こうは自分を知っているようだった。
「どうします？この女」
「さぁ？適当にしとけば」
女の靴音が聞こえる。男ははい、とだけ答えた。
やばい。
瑠華はそう思ったが力がまるで入らない。
「じゃあ、お相手さしていただきましょうかね？」
男は瑠華の手を伸ばす。制服をゆっくりと脱がせようとする。
「なっ離せよこのボケ！！」
瑠華はなんとか力を振り絞って男を殴る。
こんなとこで処女を奪われるだなんて、冗談じゃない。
「・・・ほんとにお嬢様なんですかね。その口調。見かけはお嬢様でも、殻をかぶっているだけかな」
「それがどうした。お前馬鹿じゃねーの。今は見えないけど、頭がすっきりしてきたらてめぇの顔が見えるんだぞ。そしたら退学や・・・もっと他の事も出来るんだぞ？あたしは」
別に脅そうとかそんなんじゃない。ただ、本当のことを言っているだけだった。
「そうですね。だけど、あなたは今は目があまり見えないでしょう？耳も・・・あまり聞こえないはずだ。もう一発ぐらい殴った方がいいですかね？」
そういい、なんのためらいもなく、瑠華の腹を殴る。そのあまりにもためらいの無い態度に驚いて、一瞬力を緩めた。だから、腹の中心に、思いっきりあたってしまった。激痛が、瑠華を襲った。
もうだめだ。
瑠華はその場に倒れこみ、意識を完全に失った。
その後、どうなったかは知らない。気がつくと病院で、両親は何

事もなかったように話をしていた。きっと、宮塚の人間にそんなことあってはならないと、洗い流したのだろう。
『何か』は、きっとあった。でも分からない。周りは何もなかったと言うし、医者だって無言でどこかへ行ってしまう。
よく分からない感情と、腹の痛みで、瑠華は泣いた。情けなくて、泣いた。どうなったのかも分からない、教えてもらえない恐怖が瑠華の頭の中を回って、回って、いいようがない恐怖と戦いながら生きていた。でも。
「考えても見つからない答えを、なぜいつまでも探さなければならない？」
ふと、瑠華はそう思ったのだ。だがら、消した。記憶を、あの、情けない自分を。冷たい大人を。
過去を、なんとか振り返らないようにしていた。だから、これまで生きてこられた。

「思い出して・・・いただけました？」
男の声に、はっと瑠華は我に返る。男はにこりと微笑み、瑠華に顔を近づける。
「悲しいですね。あなたは。まるで宮塚のおもちゃだ。そして、あなたがナニをされたのかも教えてもらえない」
胸の鼓動が早くなる。冷たい汗が流れ、背筋が凍る。
「なんなら、私が教えて差し上げましょうか。それをした、張本人なんですからね」
「あんた・・・・？」
「そう。私です。ある方に命じられ、言われたことを、やりました。それはあなたに精神的ダメージを与えること。なぜだと思います？」
瑠華に精神的ダメージを与えたとしても、別に宮塚の財閥が崩れ

るわけではない。なら、なぜ？
「お分かりになりませんか。それとも、恐怖で声が出せないとか？なんたってあなたの中で一番思い出したくないことを思い出したんですからね・・・」
「うっうるさい。声は出る」
男は笑い、瑠華の頬に手を当てる。
「でも、動けないでしょう。体が固まっているでしょう？まぁ、そんなことどうでもいいんですけどね」
微笑みながらそういう男はまるで、遊んでいるようだった。ただの、遊びをしている感じだ。
「で？私をここに呼んだのは、どんな理由かしら」
睨みながら瑠華は男の手をどける。男は動けたことに驚いているのか、それともこの状況でそんなことを言えることを感心しているのか、どちらとも考えているような顔をした。
「それはもちろん・・・あなたに消えてもらいたいのです、とある方が言っていました。ねぇ、宮塚さん。ここで消えてくださいませんか？生きていたって、楽しいこともないでしょう？なんなら、私が殺してあげますよ。あとね、あの時のこと、教えて差し上げますよ」
「あの・・時？」
「そう、あの時。気絶した後・・・ですよ。誰も教えてくれなかったのでしょう？だったら教えてあげます。この、張本人である私が」
なんだって？自分がしたことを教える？自分で。
聞きたい。そうも思った。だがその思いよりも大きな、思いがあった。
『怖い』。
聞いて、自分がどうなったか知りたい。でも、この本人から明かされるのは怖い。言わないで欲しい。
言わなくても、生きていけたのだ。
瑠華の困った様子に、男はにやりと微笑む。

「別に、あなたの意見など聞いてませんよ。教えるといっているのです。さぁ、目を閉じて。私に集中してください？」

ＮＯ．１５『甦る過去２』（後書き）

さて・・あの女は？そして、男が瑠華にしたことは？
瑠華、絶体絶命のピンチ！どうなるでしょうか？

NO．１６『甦る過去３』

「ほら、楽にしてください？宮塚瑠華さん」
男は瑠華の額に手のひらを当てる。そして、言葉をはっする。
「見えてきますよ。もうすぐ・・・ね。ほら・・見えました？」
その言葉と同時に、今、瑠華は座っている地面も、もたれている壁も、すべての空間がねじれ、今、どこに座っているのかも分からないようになっていた。
声が・・・聞こえる。

『・・・気絶しましたね・・・どうしましょうか？まぁ、あの方は好きにしていいって言ってたしね。
でもね、別に私はあなたに特別恨みなど持っていないのですよ。だけど、それは別。私はね、あなたに消えて欲しいだけなのです。じゃないと、私は殺されるんですから・・・』

「・・・何？今の」
目を瞑ったまま、瑠華は問う。男は黙ったまま、手のひらにこめる力をわずかに強くして、そのままの状態で静止する。

『多分。来年同じ時。私はまたあなたを襲うでしょう。まぁ、こんな事を言っても、この状況を知れるのはその時ですけどね・・・。私はこんな術を使えるのですから。では、そろそろ失礼しますよ、宮塚瑠華さん。覚えておいてください。消えることを』

「・・どういうこと」
「・・・操るための、前置きとでもいうやつでしょうか。今あなたの頭に、死という文字を植えつけたのです。これを、思い出したとき、あなたが死ぬように」

聞いてはいけない、秘密の呪文。本当にそんな事があるのかと、確信がもてるくらい、自分の体は勝手に動く。
「すいませんね。だますみたいな形になって。私はあの時、あなたにもう、術をかけていたのですよ。そして、このことを、聞いた時・・あなたは消える。そうですよね」
しまった。瑠華はそう思い、なんとか動きを止めようとするが、何を思っても止まらない。頭の中に出てくる文字は『死』という一文字。
男から手渡された果物ナイフを、ゆっくりと、自分の心臓へとむける。
やめて・・・
でも、言うことを聞かない。
もう、終わりだ。自分はこんなにあっけなく死ぬのか。やはり、悲しい生き物・・・・。

「なぁーに、言ってんだ馬鹿。お前にそいつが殺せるか」
聞き覚えのある、男の声。瑠華の動きが一瞬止まる。
「せ・・・つな・・・・」
小声で、そう言う。
「遅れてわりぃな、瑠華。これはこれは、手にナイフなんてもっちゃって。でも間に合ってよかったよ。じゃないと・・俺は人一人、殺さなきゃいけなかったからね」
男の顔が、凍りつく。
また、あの顔だ。まるで魔物の顔。美しい、魔の美貌。
「さっさと術解け。三年A組の、加藤重義さん？あんたの情報は入ってきてんだ。俺に潰されたくなきゃ、さっさとしろ」
重義はためらいながら、瑠華から手のひらをはずす。その瞬間、呪縛が解けたように、瑠華は首をななめに傾け、ナイフを下に落とす。
「・・・東郷。お前、なんで」

瑠華は苦しそうに息をしながら、周りを見渡す。
「んー、それは後。なぁ、加藤。あんたが慕ってる『あの方』。分かったぜ？お前のおかげで。サンキュ。遠慮なく、潰してもらうよ。これであんたら加藤も終わりだな。じゃな」
にこりと笑い、刹那は瑠華の腕を握る。
「よく、頑張ったな」
その微笑が、瑠華を少し落ち着かせる。ゆっくりと抱きかかえられ、よく考えるとお姫様抱っこ。
「おっお前、何してんだよ！」
「まぁまぁ、あっもうお化け屋敷終わってるよ？みんな慌ててた。瑠華様がいないって。多分これじゃサバイバルゲームは中止だな」
そう一人でしゃべり、あっけにとられている瑠華の顔を見つめ、微笑みながら歩き出す。
瑠華は気がつき、声をはりあげる。
「おっおい、下ろせ！何適当に流そうとしてんだよっ、聞いてんのか、東郷！」

NO．17『見えない影1』

「もっ申し訳ありませんっ！宮塚様・・本当になんてお詫びしたらいいか」
聖薔薇学園の理事長、内藤千里は、いつもの濃い化粧を見えないほど薄くして、青ざめた顔をし、瑠華にお辞儀をする。
「ほんと、お詫びなんかされても許すはずありませんけど」
瑠華は理事長を冷たい瞳で睨み、言葉を吐き捨てる。
「でっですが。お願いです。すいません・・・」
その言葉を聞き、刹那は理事長の椅子から立ち上がって聞く。
「こんなことが二回も続いていいと思ってんの？しかも宮塚だよ。この学園潰すぐらい簡単なんだよ」
その言葉に、理事長は、さらに戸惑う。
「まぁ、実際何もないから、いいけれど・・。それでも、この私の心を傷つけたとして、覚えておきますからね？」
「みっ宮塚様・・」
「いいわね。行きましょう刹那さん」
「あいよ。じゃあねー、理事長。この大切な学園。お大事に・・・ね」
にこりと最後に刹那は微笑む。理事長は腰を抜かし、その場に倒れこんだ。だが、そんなの気にしない。気になんかする、はずもない。

「瑠華っ！」
その声に、瑠華は理事長室の扉を閉めた後、目を輝かせる。
「レナ。待っててくれたの」
「えぇ。当たり前じゃない。今日は買い物？に行くんでしょう」
黄金の美しい髪を風に乗せ、お人形のように可愛らしい顔は、ゆ

っくりと瑠華の手を取る。
「どこ行くんだ？」
刹那のその表情と、その言葉が、あまり一致しなかったことが気になる。顔は冷たい表情のまま、だが声はいつもの明るい刹那の声。
「えっえぇ。ちょっと庶民の遊びを体験するの」
あまり、気にする必要はないか。
「俺も行く」
「は」
「俺も、いくって。いいよね・・・レナちゃん」
なぜレナに聞くのかと首をかしげる。レナは一瞬動きが止まったが、いつもの笑顔で刹那に微笑みかける。
「ええ。もちろんよ東郷さん。いいわよね瑠華」
「あたしは、レナがいいなら」
ちらりと刹那の方向を見ながらそう答えると、刹那の顔が少し引きつる。まるで、誰かを睨んでいるような。
「どうしたの、東郷」
「なんでもない。さっ行こうよ」
「ほら、行きましょ瑠華」
二人にせかされ、瑠華は苦笑いをしてしまう。でも、この時、歯車が一致していないのは分かっていた。
分かってはいたけど、でも、嫌だったのだ。何もない、そう思うことにし、瑠華達は街へと出て行った。

番外編　１８『刹那の思い』

あの時、瑠華が危ない、そう思ったとき俺は焦った。もし間に合わなければ、きっと瑠華は殺されていただろうと知っていたから。

「刹那君。ねぇ、聞いてるの？」
夜の十二時。美コンの前々日。
真っ赤な真紅の薔薇のようなドレスを纏い女は、刹那の腕に抱きつく。
「何？なんかあった」
「別に何もないけど。でもさ、何もなくてもちゃんと私の言うこと聞いてよ」
こういうの、はっきり言ってうざい。しつこい女は嫌いだ。
「うざいから、そういう事、やめてくれる」
言い放つと女は黙り、手を腕から離し傍にあったコップにワインを注ぐ。
「飲む？刹那君」
「今はいい。ってか高校生に酒を勧めるなよ」
「いいじゃない。そういう人だったの？刹那君。でも、この頃変わったわね」
もう閉店した高級クラブ。女の名前は、ミキ。きっと偽名であろう。
たまにきていた刹那は、このホステスとも仲がいい。だが、特別とかそんなんじゃない。ただの、ホステスだ。
「変わった？俺が」
「えぇ、変わったわこの何週間かで。なんか、前より影が取れた感じ」
「ふ、ん。別に大して変わってないけどね。ちょっとおもしろい奴

見つけただけ」
「おもしろいやつ？刹那がそんなこと言うなんて珍しい」
「ミキ」
「はいはい、すいませんね」
軽く謝れ、刹那は動きを止める。
「でも、ほんと、刹那君は『裏』がある高校生だよね。みんなそんなの知らないんじゃない？」
「さぁ。別に、どうでもいいし」
ミキは笑う。
「そういう人ね、刹那君は」

朝は小鳥のさえずりと、美しい朝日のせいで、起きるのがめんどうくさくなり、刹那は執事に伝える。
「俺、今日昼から行くから」
そういうと、執事ははい、とだけ答え、そのまま帰っていく。
こうしてベットに寝転んでいると、思い出す。昔、あの冷たい視線しか浴びなかったことを。
周りはすべて庶民。そして普通とはかなり違う刹那。その庶民と刹那を結ぶ糸は、何もなかった。だから、すべてがどうでもよかったし、友達なんか作る気もおきなかった。
だから、この学園にいると不思議な感覚がするのだ。
『楽しい』
そうも、思えてきていたのだ。
「おい、やっぱり、行く」
部屋を出ようとしている執事をまた呼び止める。
「左様ですか。わかりました。お車の用意をしておきます」
微笑みながらそういう執事をみて、何がおもしろいのかと刹那は思

う。
制服に着替え、髪を整える。
「さて、行くか」
そういい、部屋を出た。

「キャーー！刹那様」
女子の甲高い声が耳につく。だが、この車を下りたらもう王子様だ。
「やっほ、おはようみなさん」
明るい笑顔でそういい、ちらりと前を見ると、やはりその場の空気にあっていない、雰囲気。丁度刹那の隣に車を止めていた瑠華が、じろりと刹那を睨む。
『アルテミス』という月の女神の異名をもつ、漆黒の髪をした女の子。刹那が唯一、例外と思える女。
「おはようございます、宮塚様」
取り巻きが彼女にたかる。
「おはよう」
そう一言だけつぶやき、少し微笑む。これも、彼女の技だ。
「おっはよう、瑠華ちゃん」
刹那はハイテンションで話しかける。
「あら、おはよう、刹那さん」
冷たい瞳でそういわれると、なんだか悲しい。だが、これは演技の途中だとあきらめる。
「一緒にいこ」
「嫌よ」
小声でも拒否される。だがあきらめずに話しかける。
「ね、行こうよ」
すると瑠華はため息をつき、こちらを向く。
「あのさ、疲れない？演技し続けてて」
この言葉を聞いたとき、刹那はとても驚いた、反面、嬉しかった。

知っていたのだ、彼女は。これが、演技だということを。だが、彼女といると、本当に笑顔になっている気が、する。気がするだけかもしれない。けれど、それでも一緒にいたい。そう思える人間が、やっと出来たのだった。

これからも、俺達のような人間には敵が出現する。それが、たとえ瑠華を傷つけることであっても、俺は、しなければならない。守りたい。そう、思っているのだから。

【番外編ー刹那の思いー終】

番外編．１８『刹那の思い』（後書き）

なんか突然でびっくりしたかもですが、なんとなく、ここらへんで入れといたらいいかな、と思っていれました。

NO．19『見えない影2』

「へぇ・・これがマンガっていうやつ」
刹那は不思議そうに手に持っている物体を眺める。
「私も、はじめて見ましたわ」
レナも同じような反応をする。それを見た瑠華は、疲れる、と独り言を言ってしまう。まるで小さなこともを相手にしているようなのだ。
この二人は商店街には出ていなかったらしく、周りにあるすべてのものが珍しいらしい。辺りを歩き回って眺めては、いちいち報告してくる。
「もう、うろうろしないでよ。レナも！ちゃんと横に並んで」
「はいはい。分かったよ」
「すいません、瑠華。ちょっと浮かれてしまって」
「別に・・・いいんだけど。それよりそんなに珍しいの？」
同じ金持ちの瑠華はなれたものだ。よく暇だったらここへ来る。もちろん、変装して。黒いニット帽をかぶり、そこら辺に売っている古着というだぼっとした服をきて、歩いているとまるでばれない。
現在も、その格好だ。
「ええ、珍しいわ。それに好きよけっこう」
黄色いパーカーを着て、赤いキャップを嬉しそうに被るレナ。だが、そんな今風の服を着てても、やはり目立ってしまう。というか、逆にいつもの服装よりも目立っている。
だが、なんというか、以前から明るく、可愛らしいレナだ。どんな格好をしていてもやはり可愛い。
「それに、動きやすいほうが好都合だもの」
にこりと微笑み、キャップを深く被る。その言葉がまだ、意味深だ。
「なんで」
「だって、こんな商店街は歩きやすいほうがいいでしょ」

「ああ、そりゃそうだね」
瑠華は深く考えず、そのまま進む。
「もしかしたら、他に使い道があるのかもよ？」
歩き出そうとするレナと瑠華に、刹那はまぜか怒ったようにそう問う。
「どういう意味？」
「別に、、ただなんとなく思っただけだよ。忘れて」
「・・ふん。何よなんか暗い感じになって。どうせ行くんなら明るく行きましょうよ」
心の中に秘めた思いをなぜか隠すように、瑠華は大声をあげる。
その思いは、まだ本人も気づいてはいないだろう・・。
「あっそうだ。レナ、これ渡そうと思って」
取り出したのは『月』の形をしたネックレス。
「・・・これ、どうしたの？」
レナは驚いたようにそのネックレスを見る。
「商店街の中にあったアクセサリー屋に売ってたの。かわいいし、どうかなって思って」
しばらく黙り込んだレナに、少々不安を感じた瑠華は恐る恐る顔を近づける。
「ごめん、変だった？」
するとその言葉に反応し、肩を震わせながらにこりと笑う。
「ううん。可愛いわ、ありがとう。大切にするから」
その言葉とは裏腹に、相変わらず顔色は悪く、細い腕を力いっぱい握り締めて、何かに震えているような顔をする。
心配だった。だが、なんだか聞けなかった。聞いてはいけない、と思ったから。でも、それだけじゃない。『聞きたくない』。確かに、そう思ったのだ。

NO．２０『分からない思い』

『不思議だ』と瑠華は思う。何を、思っているのかが分からない。自分が分からない。

昔から、特に何もなかったこの人生。それでも、なんとか生きていこうと思ったことに、理由はない。いつか、変わるかもしれない、と思ったから。それがまぁ、理由ともいえるかもしれないが。

昨日のあのレナの態度。瑠華は気にしていた。それに横目でみた刹那の顔がとても重かったから。まるで親の敵を睨むような顔をしていたのだ。

この頃、なぜかレナに刹那が敵意を見せているのは知っている。だが、理由は知らない。そしてもう一つ。あの『月』の形をしたペンダントを渡した時のレナの表情。

怖かった。

なぜか、とても怖かった。寒気がして、自分の体が固まっていくのが分かった。それは自分が買ったペンダントが気に入られなかったからだとかそんなんじゃない。あの月に、何か深いものがあることを密かに感じたのだ。実際、その月を見てレナは固まったのだから。

「どーしたの。暗い顔して」

真昼の休み時間。周りの目を盗んで裏庭のベンチにやってきた瑠華は、明るい太陽を見つめながらも暗い表情だった。それをなぜか見つけてやってきた刹那は、隣のベンチに腰掛ける。

「・・別に」

「あ、何その冷たい反応。やっぱりあれ？昨日の西園寺の表情？」

「まぁ、ね」
刹那はしばらく瑠華と同じように太陽を眺め、そして語る。
「お前と西園寺って、どうやって知り合った」
ちょっと命令口調なのが気に障ったが、瑠華は答える。
「一年の入学式。それが何よ」
「どっちから声かけたの」
「あたしよ。なんか草の影に一人で座ってるのを見たから」
そう、あの頃はレナがすべてだった。妖精のように可愛らしいレナ。やさしく、明るく、とてもいい子だ。だからこそ、今も続いている。
「・・・中学生の時、どうだったか知ってる？」
「はぁ？」
その意味不明な問いかけに段々腹が立ってきた瑠華は、地面に足を下ろし、勢いで起き上がる。
「あのね、なんなのよさっきから。ってか、この前からっ。レナの事ばっかり敵対しちゃって。しかもレナのことが知りたいなら、自分で探れば？！」
だが、意外な答えがかえってくる。
「もう、知ってる。西園寺がどんなのか、お前知りたいか？知りたいなら、話してやる」
『知りたいか？』
この問いが、瑠華に重くのしかかる。
なぜだろう。どうして、この問いに反応してしまうのだろう。
「お前は、知りたくないんだ。そうだろ？お前は真実から目を背けすぎだ。あの時もそうだ。お化け屋敷の時。あれはお前がもっと自分の信念を強くもっていたら、あんなものを重い荷物として背負わなくてもよかったんだよっ！」
なんだか今日の刹那は激しいなと瑠華は驚くが、驚く表情など見せない。
「何よ熱くなっちゃって。いらいらしないでよ。こっちまで苛つく

っての。逆切れしないで」
「逆切れなんてしてねぇって。本当のことを言ったまでだっつうの」
「うるさい。あんたに何の関係もないんだから、ほっといてよ」
「ほっとけないから言ってんの！！」
「何で！」
「お前が好きだからっ！」

NO．21『繋がった糸』

静まり返る裏庭。
は？今なんてったこいつ。
「・・なんて言った？今・・」
「お前が好きだって言ってんの。この鈍感女」
「どっ鈍感って何よ。しかも何よこれっ！なんで突然告白になるのよ」
「お前が言わしたの！あーむかつく。腹立つな・・・。なんで俺から告白なんてしなきゃいけないんだよ」
瑠華はこの身勝手な男の本性を見た気がした。まぁ、前から知っていたからあまり驚きはしないけれど。
ため息をついている瑠華に、刹那は横に座れとと言う。しかも命令口調で。
「何よこのプレイボーイナルシスト」
「プレイボーイは明るい王子様の役柄だっつうの」
じゃあ、ナルシストはと聞きたくなったが、まぁ、言わないでおく。
「何よ。最初会った時あたしのこと馬鹿にしたのに」
「馬鹿になんかしてない。俺と一緒の匂いがしただけだ」
『同類』この言葉が脳裏に浮かぶ。
世界的に有名な財閥の一人娘、一人息子で、同じく猫をかぶっている。
これだけでも同じ匂いがするのに、二人には裏がある。そしてそれを誰にも知られてはいけない。瑠華の場合はレナがいたけれど。それでも心が晴れることがなかった。瑠華にとってレナは学園に来る唯一の理由、だけ。
そんなに、心が弾むわけもない。
周りからは期待され、そして宮塚財閥の一人娘という大きな看板

をもたされて、それを背負って生きてきた。だから、瑠華は努力した。毎晩遅くまで勉強や読書に励み、決して、宮塚の品を落とさないように、悪い噂もなくして、完璧な人間になった。
けれど、それがなんだと言うのか？
ただ過ぎてゆく時間。本当の自分も出せず、それを語れる人間もいない。聞こうとする人間もいない。

「そうだろ、瑠華。俺とお前は同じ。別の人間だけど、同じ境遇で育ってきた。周りの媚びた面。本当のことを言ってくれない周りの人間。俺を見ようともしないクラスの奴ら。すべてが俺にとって無意味だった。存在さえ、いらなかったんだ。お前は？」
そう、刹那と『同じ』。
自分だけの世界に、生きてきたのだ。今までは。
「・・・あたしら、同類なんだ」
「ああ。そうだろ」
「同じ、生き物？」
「ああ」
心の中で、何かがはじけた気がした。今まで溜めていた『何か』がひび割れ、崩れ去ったような。
自分だけの世界が、なくなって、自分の領域に何かが入り込んできたような。
「刹那」
瑠華はただ、名前を呼ぶ。
「何」
刹那も淡々とそれに答える。それだけの会話が、今までのなんの味気もないくだらない雑談より、何倍も嬉しかった。
生きている。
そう思えた。自分の居場所が、ようやく見つかったのだと、実感できた。
「あたしら、生きてたんだね」

「これからは、な。で、告白の返事は」
「またにしとく」
刹那の不満げな顔を微笑み見ながら、瑠華はベンチを立つ。
「じゃあ、問題は後一つだね」
「あと一つ？」
刹那は忘れているらしく、ベンチに座ったまま制服を整える。
「レナよ」
瑠華のその声に、異様に反応した刹那は、瑠華の口からその言葉が出てきたのが意外そうな顔をした。

ＮＯ．２１『繋がった糸』（後書き）

さぁ、クライマックスに突入です。

NO．22『灯台もと暗し1』

現実は、いつもと同じ風が吹く中で、瑠華と刹那の心に吹く風は、いつもの冷たい風ではなく、温かいようないつもとはまったく違う風が吹いていた。

それが、本当にいいことなのかは知らない。普通の一般人にはいいことだとしても、大人になると一つの会社を背負って生きなければならない、瑠華のような別クラスの人間には、駄目なことかもしれない。けれど、それでもいいと思えた。それほど、幸せなことだったから。

「瑠華。なぁ今日俺に付き合えよ」

茶髪の髪をワックスで固め、今風の服を着た刹那は、いつものように瑠華に話しかける。学園とはまったく違う雰囲気だが、それは瑠華とお互い様。その命令口調を咎めることはできない。

なんせ、この男も一つの会社を背負って生きなければいけない男。多少、いやかなり横暴で自己中なのはしょうがない。

「なんであんたに付き合わなきゃいけないの」

「って言いつつ、ちゃっかりギャルな服着てるじゃん」

それを言われたらおしまいだろう。学校も休みな土曜日の朝十時。瑠華はちゃっかり刹那に呼び出され、そしてどうせ連れまわされるだろうと予想し、ギャルみたいな服を着ていたのだ。

「うるさいわね。気のせいよ」

自分で言ってて苦しいことを感じてはいるが、それでもやめれない。ジーンズのミニパンツをはき、濃いピンクのTシャツを着て、でかいサングラスを頭に乗っけている。

もうすぐ、いやもう夏なのだ。

「そ。まぁいいけどさ」

「んで？どこに付き合うのよ。あんたこんなとこ来たことないでしょ」
待ち合わせの場所指定からおかしいとは感じていた。上の看板に書かれている文字は、『ゲームセンター』。瑠華は何回か来てはいるが、こんな大きなゲームセンターは初めてだ。
「ん・・ちょっとね。遊びながら大事な話がありまして」
深刻そうな顔をする刹那に、瑠華はため息をつきながらゲームセンターの扉を開ける。
「だったら早く行きましょ。どうせレナでしょ」
「まぁ、それもある。けど遊びたいなと思って」
小学生か・・・・。
「分かったから早く入るわよ。何円持ってきたの」
「何円なのか予想がつかないから、一応五十万」
「それ、ゲームセンターにもって行く額じゃないから」

そんなたわいも無い会話をしながら、二人は中へと入っていった。

「ひょー。おい瑠華！これすげぇな。なんか持ち上がってるぞ」
「あのね、東郷グループの御曹司。そんなことで驚かないでよ」
「まぁ、そうだがこんな安っぽい所にこんな機械があるなんて思わなかった」
こいつ、ここをスラム街だとでも思っているのだろうか。このぐらいの機械、あるに決まっている。
「名前なんていうんだ」
「ユーフォーキャッチャー」
「へぇ」
普通のゲームセンターにしては大きいこの店内を瑠華は見回し、ここがどこなのかを確かめようと看板を探す。
「さて、もう三十分経ったな。じゃ、本題に入るか。瑠華。看板を見る前に聞いてくれ」

突然そう呼び止められ、刹那の方を向く。
「ここ、だれの会社が作ったところでしょう？」
その質問に悪寒が走る。瑠華は目を見張りながら看板を探す。
そして見つけた、小さな看板。書いてある文字は、『ゲームセンターSAIONZI』。
「レナの、西園寺の・・会社？・・・それが、どうかしたの」
確かにちょっとは驚いた。それが、なんだと言うのか。別にレナの会社のゲームセンターだからと言って、やってはいけないという規約はない。
「うん。で、前の話に戻るけど、レナのこと、知りたい？」
刹那はいつものように気楽に聞く。瑠華がどう答えるかを楽しんでいるようだ。
「俺は、話しても別にいい。でも、お前は？真実を、俺の口から聞きたい？それとも本人から聞きたい？」
この質問からして、きっと刹那の口から聞いた方がダメージは少ないのだろう。傷つきたくないのなら、刹那の方から聞いた方がいいのだろう。
だが、それでいいのか？と自分に瑠華は問う。前から、何かレナのことについて聞きたくないと思うことが多かった。知りたいと思うよりも、聞かなくてもいいという感覚でいたから。
けれど今回はそうも行かないのかもしれない。この刹那の微笑をみていると感じる。一見気楽に笑っているようだが、この微笑み方は重要なことを意味していると感じる。
「あたしは、レナが好きよ」
「知ってる」
「だからと言って、真実から目をそらしたら駄目なのかしら」
「さぁね。今までそうして生きてきたんだ。重いものを背負って生きてきたんだ。もう、傷つきたくないなら別に俺も言わない。けど、真実から目をそらして行くってことは、歳をとるたびに重くなると思うけど」

最後の言葉は少し脅しが入っているとかんじたが、それは本当のことだと思うし、何もいえない。
「何があるのかは知らないけど。でも知らなきゃいけないんだったら、知るわ。その方が、いいと思うの」
「なんで？」
「なんでって。知らなきゃ・・・いけないんなら」
「知らなくてもいいんなら、別にいいのか？俺が言えることじゃないけど、これはけっこう重要な問題なんだよ。後の宮塚や、俺のとこ、西園寺のとこにも関係があることだから」
瑠華は黙る。まったくその通りだ。今までそう生きてきたから。しらないゃいけないことも、何か怯えてしまって聞けなかった。何かがあってはならないし、あったらどう対処するのかが分からないからである。
「まあ、まじ俺が言えることじゃねえよな。俺らは、同類なんだから。けど、変わらなきゃいけない時期が来たんじゃね？俺もお前も」
半分苦笑いをしながら、そういう刹那を見て、短い間の関係だが、とてもさっぱりしてきたなと瑠華は思う。
「変わったね、刹那」
「あ、それ前も言われた」
「誰に・・・」
「さぁね。、まぁ、そんなのどうでもいいじゃん」
この答え方は大方、ホステスとか夜の関係だろう。

「聞くよ。レナから」
瑠華はまっすぐ刹那を見てそう言った。
刹那が言ったとおり、『変わる時期』がきたのかも知れない。そして、今までの自分と別れるチャンスかもしれない。瑠華は軽く微笑んで、刹那とまっすぐに見詰め合った。

NO．２３『灯台もと暗し２』

「そっか」
刹那はただ、そう言った。その少しそっけない感じが少し瑠華の心を揺さぶる。だが、一度決めたことだ。それを覆すわけにはいかない。
「じゃ、いこっか」
刹那は軽く微笑んで、足を進める。それに瑠華はついていく。この先に、何があるのかが気になって、胸の鼓動がだんだんと早くなってゆく。
「ここ、西園寺の会社が作ったって言ったろ？裏に何が・・・あると思う？」
「裏？どういうこと？」
「こっち」
連れてこられたのはゲームセンターの裏出口を抜けた所。暗い、駐車場のようなところである。水の滴り落ちる音が、ゆっくりと、まるで心臓の音のように落ちていく。
「ここ何？」
「西園寺グループの闇ルート。情報で探ったら、ここだった」
『闇ルート』。その言葉がまるで刃のように瑠華に振りかかる。
「じゃ、何？西園寺は、闇ルートを持ってるって事・・」
「そういうこと。それで、それを取り仕切ってるのはレナの両親じゃないんだ。それを操ってるのは・・・レナ自身ってこと」
体が、止まった。一瞬にして何も動けなくなった。手も、足も、まるで木の棒のようで、今なにが起こってるのか、刹那が何を言っているのかを理解するのに時間がかかった。
「どう、いうこと。レナが、何だって？」
「落ち着けよ。混乱したら終わりだからな。実は今日俺レナに呼び出しされてるんだよね」

「なんて」
「話があるからこのゲームセンターの裏口を抜けたところに来てくれって。後五分だけど」
意味が分からない。この目の前にいる刹那の言っていることがまるで理解できない。レナが何？闇ルートを取り仕切っている？じゃあ何、あのレナは。あの妖精のように微笑んでいたレナは。偽者だったというのか。
「瑠華っ！」
放心状態に陥っていた瑠華に、刹那は話しかける。少し、心配そうな顔をして。
「ちゃんと息をして。現実を見るんだろ。俺は嘘は言ってない、事実だ。しっかりしろ」
わかってはいるけれど体はまるで動かない。
「わか、て・・る。大丈夫。息するから」
だが、だんだん胸が苦しくなっていくのは気のせいか。しているつもりだけど、息が入ってこない。

「もう、時間だ。ちゃんと自分を持てよ・・・・来る」
心の中で、何かが回り始める。機械のように、ぎこちなく。それは今までしまっていた何かを、動かすように。

「・・・あら、東郷のお坊ちゃま。もう来てたの。早かったわね」
聞き覚えのある、声。だがそれを聞いたことがあるのは、あの暗い倉庫の中で、暗示をかけられたとき。微かに聞いた、あの女の声。
ハイヒールの靴音が、空気を伝わって瑠華達に届く。暗闇の奥にうっすらと見えたのは金色。まるで本物の黄金のような、『アポロン』の、太陽の色。
そして次に見えたは赤色。まるで血のような唇は、『あの時』を思い出させる。
「れ・・・レナ」

その声を耳にした彼女は、微かに足を止める。そして、足音は急に早くなる。ようやく姿が見えたとき、彼女は少し戸惑った様子を見せた。
「・・・瑠華？なんであんたここに」
それは普段のレナを思わせるものは何もなく、高いピンヒールのハイヒールに豹柄のミニスカート。そして派手な化粧。
金色に輝くその髪だけが、悲しくも今までのレナだと確信を持たせた。
「レナ・・・本当に？なんで・・・」
その言葉をさえぎるようにレナは刹那を睨む。
「おい。東郷のお坊ちゃま。これはどういうこと？話に聞いてないんだけど」
話し方までまるで別人。
「いいだろ。どこでも。何か特別困ることでも？」
その言葉にレナは反応しない。ただこの空気を長く続けることは嫌なのか、やたら周りを見回している。
「場所を、変えましょ」
そうつぶやくとレナは暗闇の方へと歩きだす。刹那もそれにさっさとついていくので、瑠華はまだ手足が動かなかったが、なんとかゆっくりと歩く。
瑠華は、聞きたいことがたくさんあった。それは、レナも、同じだったかもしれない。

NO．２４『月夜』

場所を変えようといったレナは、ただ黙って歩く。喋りだす人間は、居なかった。
着いたのは、湖が見える、大きな公園。こんなところに来るのなら、わざわざゲームセンターで待つあわせることもなかったのだが、レナにとって瑠華は一番予定外のことだろう。
瑠華がいるから、この公園に来たのかもしれない。
「レナ」
瑠華は場の空気を気遣って喋る。だが、レナは湖の方を見たまま、何も言わない。
「あのね、あたしレナに聞きたいことといっぱいあるんだけど。闇ルートを取り仕切ってるなんて嘘だよね？レナの本当に姿は・・・あの可愛らしい、レナだよね」
別に刹那を疑っているわけではない。けれど、信じたくないんだ。瑠華はただ願う。だが、しばらく沈黙した後レナは急に笑い出す。
「・・・馬鹿な瑠華」
そうつぶやき、向きを変え、瑠華の方向を向く。
「なかなか面白かったよ、あんたといるの。私が可愛くしていれば、あんたは何も疑わないんだから。そりゃあ私はね、金持ちよ。世界的にもね。けど、あんたと比べたら私の会社はちっぽけなものよ。あんたににらまれたら潰される。そう思ったから、ふりをしたわ。可愛らしい、ふりを・・ね」
金色の髪を風になびかせ、遠いところを見て話し出すレナを瑠華は、ただ呆然と見つめる。この女は何を言っているのだろうか、と考えながら。
「あんたと仲良くなるためにはとにかく、機嫌を損ねないようにしなければと思った。でも私も分かるもの。取り巻きは、うっとうしいって。だから取り巻きはやめた。そして、対等な友達になるこ

とにしたの。あんたは私が敵だとも知らずに、一番危険な私を、傍においていたのよ」
「レナ・・・」
「馴れ馴れしく呼ばないでくれる？馬鹿な瑠華お嬢様。ほんと馬鹿よ。ずっと、ずっとだましてたのに、それにまったく気づかないで。私を一番信頼してただなんて。ほんとに・・」
それを話してるときのレナは気のせいか、少し悲しそうに、怒ったように言う。だましていたのは自分なのに？

「去年の美コンテスト。あの男に命令したのも、この私よ。精神的に・・・追い詰めるのには、これが一番いいかなって」
「っていうかさ、よく喋るね、西園寺。そんなに心につめてたことを出したかった？まるで自分を責めてるみたいだけど」
刹那が瑠華とレナの真ん中でそう叫ぶ。レナは気に触ったのか、刹那の方を見据える。
「うるさいわね。あんたさえ来なければ、こいつの会社はつぶれなくても、こいつを自殺に追い込めたのに。宮塚の一人娘がいなくなれば、もう宮塚の未来はないのに・・」
「へぇ、それが目的。そんなに、会社が大事？」
「大事で何が悪いの！」
二人がそうもめている間、瑠華は必死に頭の中で整理をしていた。
さっき、頭の中で何かが外れた。ネジ、なんて馬鹿らしいことは言わないけど、『鍵』みたいなものが、落ちたように。真実を知る力。それを、誰かが与えたように。

あぁ、そうか。
瑠華は一人、まだ見えない月を見つめて、頷く。それは、不思議な光景だったろう。刹那もレナも、話を止め、瑠華を見る。
「瑠華？どうしたんだ」

刹那が心配そうにそういうと、瑠華は首をふる。
「ううん。何もない。でも、分かったよ」
「何が」
その答えに、瑠華は答えない。
「あたしは、今まで何からも目をそらして生きてきた。それが、当たり前になっていってたから。だから、気づかなかったんだ。ううん、気づいてた。でも知らない振りしてたの。レナと別れるのがつらかったからさ。レナが、本当は可愛らしい、妖精みたいな人間じゃないって、知ってたのにね」
その答えは、まさに『予想外』。
刹那も、レナも、当の本人の瑠華でさえ知らなかった真実。
「どう・・いうことだ？」
「どうもこうも、知ってたんだ。レナが自分と同じように猫被ってたって。でも、嫌だったから。レナはこの学園の中で、唯一の存在だったし。知らない振りしてた。で、それを消去してたの自分の中で」
刹那はただ、瑠華を見た。意味の分からないと言うように。
「そんな、ことが」
そう、出来るわけが無い。瑠華は普通の人間だ。普通の人間が記憶を消せるはずが無い。だが実際瑠華は忘れていたのだ。
「さっき、思い出したの。自分の中で、何かが動いたと思って。なんとなくそう思ってたら、ふと思い出した。全部。あの時、暗い闇の中で、あまり意識がなかったときに聞こえた声。あれがレナだって知ってた。でも分からないふりしたの」
それは、孤独の呪文。自分にかけた、無意識の鎖。
暗い闇の中に一人うずくまっていた少女が、どうにか生きるために見出した不思議なもの。
「瑠華・・・・」
刹那は言葉がないような、それでも何かしゃべらなければならない

といった風に瑠華に話しかける。
「ごめん、刹那。あたし分からなかったの。真実を見つけなきゃって思ったけど。自分で・・隠してたなんてね。ほんと馬鹿みたい」
申し訳なさそうに俯く瑠華を見て、レナは微かに動く。それを見た瑠華は顔を上げ、にこりと微笑む。
「ごめん、レナ。気づいてたのに、知らない振りして。あんたのこと、きちんと見て上げられなくて」
「何が・・・ごめんよ。なんで謝るのよ」
「気づいて欲しそうだったから。ごめん。ねぇ、レナ。聞いてもいい？」
悲しそうな顔をし、ため息をつく。
「何よ」
「月。レナにとって、なんなの？」
その言葉にレナはすかさず反応する。やはり、その反応の仕方は異常である。

最終話『籠の中の鳥』

「前から気になってたの」
瑠華がそういうと、レナは黙る。
「あのネックレス。渡した時あんな顔をしたのはなんで？」
どんどん攻めるように聞くと、レナはただ黙って俯く。話したくはないだろうが、それでも言ってもらわないと困るのだ。何かが。
「別に、大したことじゃないわ」
「それでもいい。それでいいから話して」
レナは少し顔を上げ、瑠華の顔を見る。瑠華はにこりと微笑んで、レナの心を強く打つ。
「・・・月は、嫌いなの。見透かされてるようで。私の汚い感情が、さらけ出されるみたいで。嫌いなのよ、嫌い・・・見ただけで吐き気がするわ。嫌なの」
段々と激しくなる口調。憎んでいるように、言葉を吐き捨てる。
「だから、あんたも嫌いよ」
その言葉に、刹那と瑠華は驚く。
「へ？」
「嫌いなのよ。所詮人間は一人なのよ。あんたなんか、居なかったらよかったのに。嫌いよ、月もあんたも」
突然だったから、傷つくとかより、大丈夫？と聞きたくなった。刹那の顔を見ると、半分苦笑いの様子だ。多分、笑うのを我慢しているのだろう。
「ちょっと、笑うとこじゃないんだけど」
レナは刹那を睨む。それがとどめとなったのか、刹那は声を出して笑い出した。
「お前、頭大丈夫？人間が所詮一人だなんて、当たり前なこと言ってんじゃねーよ。所詮一人だからこそ、誰かと一緒にいたいって思うんじゃないのか？お前だってそうだろ。瑠華と一緒にいたかった

んだろ？瑠華が、好きだったんだろ？突然自分に暗示みたいなのかけるんじゃねーって」
　正しい、の一言だ。刹那の言葉は何か心に残ってしまう。レナも思うところがあったらしく、少し目線をそらす。
「だって、あたしは西園寺の人間なのよ。宮塚の敵で・・・」
「敵なんて誰が言ったんだ？別に敵になんかなる必要どこにある。一緒にがんばればいいじゃん」
「でも・・それじゃあ・・私は」
「ぐちぐち言うなよ。とりあえず、瑠華に謝っとけ」
レナは刹那を半分睨みながら、ちらりと瑠華をみて、そのままつぶやく。
「ごめん・・・」
　こんなに素直に謝るのも、この刹那のあっけらかんとした態度のおかげか。
結局、自分の殻に閉じこもっていた人間達が、騒いでいただけだった。今までもレナだって、怖かっただけだろう。殻の中から出るのが。進歩しないほうが、楽でいいに決まっている。
「別にいいよ。あたしも悪かったし」
苦笑いしながら瑠華がそういうと、刹那は満足そうに微笑む。その態度がなんだかおかしくて、瑠華は声を少し出して笑った。
「なんか・・・力抜けたなぁ」
刹那がそういうと、レナも少し微笑む。
「ほんと、今までのあたしなんだったのよ。悩んだし、過去に縛られてた気がしたし・・。なんかどうでもいい感じになったじゃない」
瑠華は少し不服そうにそうつぶやく。
「いいだろ、それで。気が楽だしな」
「でもあんた達って、本当に馬鹿ね」
苦笑しながらレナは瑠華と刹那を見る。
「なんでよ」

「いい人間ねって言ってるのよ。でも、変わったわね、瑠華も・・」
「あたしが？別に変わってもないと思うけど」
「私にはそう感じるだけ。初めて会った時からしたら、結構変わった」
「会うってことも、作戦の内だったんでしょ」
行き成り話はずれたが、まだまだ色々聞きたいことがあるのだ。
「まぁね。でも内面がこんなんだったとは思わなかったわよ。ただの知的なお嬢様だと思ってたから」
「それはあたしもよ。可愛いお人形さんだと信じてたもの。最初はね」
二人は顔を見合し、小さく笑った。
「さってと、一件落着って感じだな。仲直りしたんだろ」
するとレナは刹那を睨み、小さな声で物を言う。
「別に、最初から喧嘩なんてしてないわ。それに、友達だったつもりはないもの」
刹那はため息をつく。
「またそんなこと言ってさ」
「だって、会社は敵同士なんだもの。友達になんかなれないわよ。作ってはいけない。でも好きだって事は分かってる。でも、それはどうしようもないの。分かるでしょ」
悲しそうに眉を寄せて、レナは刹那と瑠華を順番に見回した。
「分かるわよ」
真剣な顔で、瑠華は頷く。
「ま、生まれるところを、間違えたって感じかな。しょうがないよ。運命なんだもの。あたし達は友達じゃない。なった覚えも無い。そうでしょ」
「ええ、そうよ。東郷と、瑠華も友達なんかじゃないんでしょう？」
「ん。あたしらは友達なんかいないしね。いなくて大丈夫だもの。だって、大切な『人』がいるから」
微笑んだその姿は、とても、美しいものだった。

友達じゃない。あなたは、『大切な人』。
この少年少女達には、友達を作ってはいけないのだ。なんせ、後に自分の命取りになるかもしれないから。だから、それよりも、大切な人。そう言うことで、確かに絆を確かめ合った。
刹那も安心したように微笑んでいる。
「私、外国へ行くわ。向こうで、事業を始めるの。だから、学園はやめるわ」
そういわれても、二人はそっか、としか言わなかった。そういう間柄でいいのだ。そうでなければいけないのだ。
「じゃあね、いい人すぎる、お二人さん。話はそれだけよ」
ハイヒールを強く鳴らしながら、レナはサングラスをかける。何も言わず去っていくレナの後姿は、普通の人から見たらとても悲しいものだったろう。だが、悲しんではいけないのだ。
瑠華は声をかける。大声で。
「レナ！月！好きになれるといいねっ！月夜が・・美しいと思えるようになりなよっ！」
そういい、瑠華はあのネックレスを手に持つ。月の形をした、商店街で買ったネックレス。
振り返ったレナは、少し微笑んだように見えた。サングラス越しに、どんな顔をしているのかは、分からなかった。だが、わざわざサングラスをかけているレナを、瑠華は何も問わず見送った。

「いいのか、これで」
少し時間が経った後、湖を眺めていた瑠華に声をかえる。
「何が？」
「もっと、聞きたいことあったろ。もうあえねーかもしれねぇぞ」
「いいのよ」
そう、いいのだ。レナは決心したのだから。もう会わないって。
「ま、お前がいいんだったら別にいいけどよ」

刹那は軽く雰囲気を変えようと声を弾ませる。この男も、きっと会社を背負う立場になるだろう。瑠華も女ながらあの宮塚を、背負わなければならないんだ。

「それでさ、返事は？俺のこと好き？嫌い？」
また極端な質問を繰り出す男だと瑠華は呆れる。
「さぁ」
「なんだよその微妙な返事」
「もし、よ。もし好きだとしても、付き合うことなんかできない」
「なんで」
「分かってるくせに。あたしらは会社を継ぐのよ？社長になるの。付き合うことなんでできるわけないでしょ」
沈黙の時間が流れる。
刹那のことは嫌いではない。だが、付き合うという意思はまるでない。もう、会社を継ぐものとして、自覚ができているのだから。
「わかってるけどよ。まぁ、いいや。じゃあ、もっとアプローチしてやる。会社を捨ててでも俺についてくるぐらい、好きにさしてやるよ」
この男、やっぱりただのプレイボーイだったのか。それともナルシスト？
「冗談じゃない。あんたがあたしのこと好きなんだったらあんたが捨てなさいよ！」
そう瑠華が言い放つと、刹那はにやりと微笑む。
「まぁ、それは無理だけどね。合併すればいいじゃん。宮塚と東郷。はい、決まり。じゃいこーぜ瑠華」
「は？冗談じゃないっ！ちょっと刹那どこ行くのよ」
刹那は瑠華の腕をつかんで歩き出す。瑠華は相変わらず叫んでいたが、刹那はご機嫌でまるでスキップでもしそうな勢いだった。

これから、二人を待っているのは決して幸福ばかりではないだろ

う。だか、籠を開ける鍵は見つけた。
だが、お互いが鍵だということを気づくには、まだ、時間がかかるであろう。

籠の中にうずくまっていた鳥が、光に向かって、飛び立った。
籠を開ける鍵は、やはり・・・傍にあったのかも・・・しれない。

「月夜ー籠の中の鳥ー」終

最終話『籠の中の鳥』（後書き）

本編はこれにて終了です。今までありがとうございました。
最後の終わり方は、まぁシンプルにしてみました。これは中編小説ですので、短く思われた方はまぁ、勘弁してください；；
では、あとがきも見てくださるとうれしいです。

後書き

本編、『月夜ー籠の中の鳥ー』。読んでいただけたでしょうか。いや、とても読めるようなものじゃなかったかもですが。すいません・・・。

このお話は私の得意分野ではないので、こんなのもかけるようになったらいいな、という安易な発想で作りました。しかし・・

疲れた。なんか最後らへんめっちゃ焦ってしまいました。

「あああーーなんでこうなるんやーーーおい、話がまた違う方向にいってるしーーー」

とか考えながら書いてたら、こんな感じに。プロットも何回も何回も書き直して、んで完成したら、こんな感じになっちゃいまして。

ああ、やはりまだまだ修行が足りませんね。もっとがんばらなくては。

そして、本編ですが、意味・・意味・・分かったでしょうか；；主旨が分かりになられた方、少ないではないかと心配です。それでなくても文章力がないのに、本当にすいません・・！！

（落ち着き中・・・・）

ちょっと深呼吸してみて、ちょっと落ち着きました♪

とにかく、自分の中に閉じこもっていた瑠華や刹那、そしてレナが、周りの人間との係わり合いで少しずつ変わっていき、そして自分の籠から出れる鍵を見つけるお話です。

まぁ、主旨はそれです（ぇ

レナの西園寺と、瑠華の宮塚は敵同士、ライバル同士として有名なので、瑠華とレナが仲良くなってはならないのです。
この聖薔薇学園の人間は仲がいいと知っていますが、それが演技ではないのかと思っている人が多いのが事実です。

ま、その後はレナは会社を運営するために勉強を外国でしています。瑠華と刹那は相変わらずって感じですね。

レナと瑠華は大人になるとまた再開します。でももちろん敵として。レナも瑠華も演技力ありますしね。大人をだますぐらい、大丈夫なわけです。

悲しい過去に捕らわれて、自分の運命を呪って生きていると、絶対に楽しいはずがありません。
それを抜けられるかが、一番の勝負どころじゃなんでしょうか。
瑠華も刹那という同じ運命をたどってきたものを見つけ、そしてレナとの間にあった空間もうめ、そして、籠の中から出たものの、自分の運命を受けいれられました。

刹那も、瑠華と同様、冷めた人間になっていたのに、瑠華と共にいることで、段々と変わっていきました。
そしてレナも、瑠華との間にあいた空間に苦しめられ、そして敵でなければいけない瑠華を好きになってしまうという苦しい状況に陥っていましたが、なんとか割り切ることが出来ています。

みなさんも、もちろん私もふくめて、籠の中から出ることに、恐れないようになりたいです。

それでは、今まで読んでくださって本当にありがとうございました。
これからも大いにがんばります。

次の作品は、異世界ファンタジーを書こうと思います。
では、またお会いしましょう。

２００７．１１．０１

ｔａｄａｙｏｓｈｉ．ｅｉｔｏ－８８．ｌｏｖｅ@ｅｚｗｅｂ．ｎｅ．ｊｐ

月島愛夜

後書き（後書き）

またこの小説の短編を出そうとか思っています。落ち着いたら；；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8063c/

月夜ー籠の中の鳥ー

2010年10月9日01時04分発行